

プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(1)

Peorbatjaraka's *Kepustakaan Djawa* (1)

青山 亨、増井美佳 訳

Toru AOYAMA, Mika MASUI

訳者まえがき

本稿は、プルボチャロコ (Raden Mas Ngabei Poerbatjaraka) が著した『古典ジャワ文学史入門』(*Kepustakaan Djawa*) の日本語訳である。原題を直訳すると「ジャワの文献」となるが、意をとって表記の訳とした。本稿のもとになったのは、増井が2013年度に東京外国語大学外国語学部提出した卒業研究『*Kepustakaan Djawa* (邦題「ジャワの文献」) 全訳』である。増井はジャワ文化の中心地の一つであるスラカルタに2年間留学し、語学の研修とジャワ文化の学習に努めた。帰国後は、本書の翻訳を卒業研究の対象とし、青山の指導のもとで翻訳に取り組んだ。完成した本書の全訳を単に卒業研究にとどめず、何らかの形で広く公開することは、当初より青山と増井の希望であったので、ここに、青山が訳文を全面的に見直し、直すべきところを直し、参考文献リストや訳註などを補足したのが本稿である。日本における古典ジャワ文学の理解につながることを期待している。本稿は青山と増井の共訳であるが、最終的な責任は青山にある。訂正や補足すべきところがあれば、ご教示いただければ幸いである。

著者のプルボチャロコ博士 (1884—1964) はジャワ古典文学研究、ジャワ語学、歴史学などの分野で業績を挙げたインドネシア人の学者である。中部ジャワのスラカルタの宮廷官吏の息子として生まれた。名前の前に付くラデン・マス・ンガベイは貴族の称号である。バタビア (現在のジャカルタ) でオランダ人研究者クロムなどから学び、1921年に宗主国オランダのライデン大学に留学して博士号を取得した。1928年に帰国後、バタビア中央博物館でジャワ古典文学の調査に従事した。1945年のインドネシア独立後は、ガジャマダ大学、インドネシア大学において教鞭をとり、多数の著作を通じてオランダのジャワ古典文学および歴史研究の伝統を後進に伝えた。宮廷の伝統的文化とオランダの近代的学問の両方を身につけ、独立後のインドネシアにジャワ研究の礎を築いた一代

の碩学と言える。

著者の代表作の一つである『古典ジャワ文学史入門』は、1952年に初版がジャカルタのジャンバタン (Djambatan) 社によって出版され、その後も、幾度にわたり増刷がなされてきた。インドネシアの大学の国文学科・地域文学科等でも参考書として用いられ、ジャワの文学を学習・研究する者にとって基本となる有益な入門書である。9世紀頃の古ジャワ語の作品から19世紀のイスラーム期のスラカルタ宮廷で創作された現代ジャワ語の作品に至るまで、主に文学作品として重要なものを選び出し、ほぼ時代順に配列して、一般読者向けに紹介し解説を行っている。ジャワ語文学の歴史は、19世紀までの宮廷中心の文学と、その後、独立後も書き続けられている近代的な文学に分かれるが、本書では前者のみを扱っている。ジャワ語は現在でも生きている言語であるが、公用語であるインドネシア語に対する地方語としての地位に甘んじている。文芸の分野でもインドネシア語による活動が一般化し、それ以外のジャワ語を含む地方語による文芸活動は地方的な活動にとどまっているのが実情である。本書で取り上げられているジャワ語の作品は、かつてジャワの宮廷が文芸活動の中心であった時代の産物であり、その意味で本書の対象は古典ジャワ文学と呼ぶのがもっとも適切であろう。原題のPerpustakaanは「文献」、「図書」という意味であるが、以上の事柄を考慮して、書名については「古典ジャワ文学史入門」という訳を採用することにした。また、原本は、ジャワ語版 (原題*Kapustakan Djawi*) とタルジャン・ハディジャヤ (Tardjan Hadidjaja) の協力を得て書かれたインドネシア語版 (原題*Kepustakaan Djawa*) の2種類が出版されており、今回の訳出に際してはインドネシア語版を底本とし、ジャワ語版を適宜参照した。

本書は、ジャワ文学に多少とも馴染んでいるジャワ人を主たる読者に想定しているため、ジャワ人にとって当然のことは簡潔に、逆に興味を引くことには詳しく筆を割いている一方で、ジャワ社会に流布していた通俗的な文学史理解に対してはオランダ流文学の立場から痛烈な批判を行っている。このため、ジャワ人以外の読者にとってはややバランスが悪いこと、また、当然のことながら、1950年代以降の研究が反映されていないことに不満が残る。しかし、古ジャワ語から現代ジャワ語までの文学活動を1冊の本で包括的に記述した概説書で、本書をしのぐものはインドネシアにおいても未だ刊行されていない。本稿では、原書を全訳した上で、日本の読者向けに不足している部分を訳註で補うことにした。より包括的なジャワ語文献の概観としてはPigeaud (1967-80) を、また古ジャワ語文献についてはとくにZoetmulder (1974) を参照していただきたい。

本稿では、原書の「はじめに」、「第1章」、「第2章」を訳出した。収録作品としては、シンガサリ王国時代までの26点が対象である。残りの58点を対象とする第3章「新しい時期の古ジャワ語文献」、第4章「中期ジャワ語の発達」、第5章「中期ジャワ語の韻律詩」、第6章「イスラームの時代」、第7章「初期スラカルタ時代」については、引き続き公表する予定である。

訳文について

1. ジャワ語およびインドネシア語のラテン文字表記について、原著では旧綴りが使われているが、本稿では現行の新綴りに統一した。ただし、旧綴りで刊行された出版物の題名や著者名などはそのままにした（例えば、本書の表記は、新綴りではPurbacaraka著 *Perpustakaan Jawa* となるが、旧綴りのままにした）。
2. 第3章までの作品は古ジャワ語で書かれている。古ジャワ語のラテン文字表記については、標準的な翻字方式 (Zoetmulder 1982) に統一した。ただし、ŋ については ng で表記した。サンスクリット語と同様、e と o は常に長母音である（例えば、デーワdewa）。また、母音 ṛ は「リ」とカタカナ表記した（例えば、クリシュナKṛṣṇa、ウリッタサンチャヤWṛttasañcaya）。なお、サンスクリット語由来の v は w で表記されることに留意されたい（例えば、シヴァ神Śiva、ヴィシュヌ神Viṣṇuではなくシワ神Śiwa、ウィシュヌ神Wiṣṇuと表記）。ただし、『ラーマーヤナ』の作者ヴァールミーキと『マハーバーラタ』の作者ヴィヤーサについては、原則的にはワールミーキWālmikiおよびウィヤーサWyāsaと表記したが、ジャワ語では伝統的に w ではなく b で表記されているため、古ジャワ語の作品中に登場人物として現れる場合にはバールミーキBālmikiおよびビヤーサByāsaと表記した。
3. 現代ジャワ語のカタカナ表記については、原則として現代ジャワ語の発音に従った。標準的な現代ジャワ語では、語末の開音節の a は /o/ と発音され、さらに、語末から2番目の音節も開音節の a である場合、その a も /o/ と発音される（例えば、Poerbatjaraka は poerba と tjaraka の複合語なので、それぞれこの規則が適用されて Poerbotjaroko と発音されるため、プルボチャロコとカタカナ表記される）。本稿では、現代の人名や地名などについては慣用によって現代ジャワ語の発音に従って表記した。
4. 古ジャワ語の名称と現代ジャワ語の（とくにワヤンにおける）名称が異なる場合でも、統一はせず、文脈で使い分けた。代表例として以下の人名がある：ラーマRāmaとラマRama、シーターSītāとシンタSinta、クリシュナKṛṣṇaとクルスナKṛṣṇa（それぞれ古ジャワ語と現代ジャワ語）。ただし、ラマをロモなどと表記することは原則として行わなかった。
5. 原註と訳註を区別するため、原註については註の冒頭で《原註》と表記した。
6. 簡単な訳註については、文の流れを損なわないよう、訳文自体に補足したり、丸括弧で挿入したりした場合もある。

7. 原書では、古ジャワ語文献の作成年代はサカ暦で表示している。サカ暦はインド起源の太陰太陽暦である。サカ暦の年号に78を加えたものが西暦の年号に対応する。イスラーム化する以前のジャワの宮廷で使われており、バリ島では現在も西暦と併用されている。

本稿で訳出した章

はじめに ジャワ語の文献

第1章 古い時期の古ジャワ語文献

- 1 チャンダ・カラナ
- 2 ラーマーヤナ
- 3 サンヒャン・カマハーヤーニカン
- 4 ブラフマーンダプラーナ
- 5 アガスティヤ・パルワ
- 6 ウッタラカーンダ
- 7 アーディ・パルワ
- 8 サバー・パルワ
- 9 ウィラータ・パルワ
- 10 ウドヨーガ・パルワ
- 11 ビーシュマ・パルワ
- 12 アーシュラマワーサ・パルワ
- 13 モーサラ・パルワ
- 14 プラスターニカ・パルワ
- 15 スワルガローハナ・パルワ
- 16 クンジャラカルナ

第2章 韻律形式の古ジャワ語文献

- 17 アルジュナウィワーハ
- 18 クリシュナヤーナ・カカウイン
- 19 スマナサーンタカ・カカウイン
- 20 スマラダハナ・カカウイン
- 21 ボーマカーウィヤ・カカウイン
- 22 バーラタユッダ・カカウイン
- 23 ハリワンシヤ・カカウイン
- 24 ガトートカチャーシュラヤ・カカウイン
- 25 ウリッタサンチャヤ・カカウイン
- 26 ルブダカ・カカウイン

はじめに ジャワ語の文献

本書でジャワ語の文献と呼ぶのは、ジャワ語を用いて記された物語や説話の総称である。

ジャワ語は、オーストロネシア語族、すなわち東南アジアの島嶼部をはじめ、北は台湾から西はマダガスカル、東は南米の西海岸に及ぶ地域に住むすべての先住民族によって使われている諸言語の語族に属している。本書では、オーストロネシアという名称はあまり使われていないため、インドネシア語族という名称を用いることとする。⁽¹⁾

1884年、ブランデス (Brandes) 博士は、上記の地域に住む諸民族はかつて同一の言語を有していたことを明らかにした。⁽²⁾ これは、これら諸言語の比較研究を行うことによって判明したのである⁽³⁾。

また、1889年にはH. ケルン博士の比較言語学的研究によって、これらの諸民族の先祖がまだ一つの場所において、一つの言語を使用していたとき、彼らの故地は、現在のインドシナ半島にあるチャンパであったことが明らかとなった。⁽⁴⁾

またその後のP. W. シュミット (Schmidt) 博士の調査により、インドネシア語族の出自は中央アジアの起源ではないかとの推測がなされるようになった。⁽⁵⁾ しかしこの真偽のほどは未だ明らかではない。

はっきりと言えることは、かつてインドネシア語族集団の祖先はチャンパという一つの土地に集住していたということである。比較言語学的な研究のほかにも、ファン・スタイン・カレンフェルス (Van Stein Callenfels) 博士、ファン・デル・ホープ (Van der Hoop) 博士などが行った石斧や石鏃などの石製武器の調査によっても、インドネシア語族集団はチャンパ起源であるという説が裏付けられている。さらにこの調査ではより詳細に、チャンパよりもさらに北西、すなわち中国南部に位置を特定している。⁽⁶⁾ およそ紀元前1500年頃のある時期に、インドネシア語族集団はその故地を追われ、上述の島々に移住したという。この理由は明らかになっていないが、北方または西方からの異民族の侵攻によるものと思われる。

分散したのち、彼らは移住したそれぞれの島ごとに集団を作り、生活していた。

このように分散して移住したので、時を経て、それぞれの集団の言語は他の集団の言語とは通じないようになった。分断されたそれぞれの言語が移住した土地に適合した形で変化していったためである。フィリピンに定着したインドネシア語族はフィリピン語

に、ジャワの地に定着した言語はジャワ語に発達した。スンダやマドゥラにおいても同様であった。

インドの影響を受ける以前のジャワ語がどのようなものであったかを知る手がかりは今ではない。なぜならば、その当時のジャワ語は、おそらく文字を持たなかったからである。

現在でも使用されているジャワ文字は、およそ西暦紀元元年頃にインド人によってジャワの地に持ちこまれたインド系の文字に起源をもつ。⁽⁷⁾ 当初、ジャワの地におけるインドの文字の利用は、インド人たちの間での貿易取引に関する文書のやり取りなどに必要とされただけであった。この言語がサンスクリット語かあるいは他のインド系の言語であったのかは明らかではない。しかし手がかりとなるものもわずかながら存在する。すなわち、ジャワの地における最古の文章はサンスクリット語で書かれたものだという事実である。⁽⁸⁾ さて、時が経つにつれて、前述のインド人らはジャワの地でジャワの女性と結婚し、やがて子どもをもうけた。当然、それらの子どもたちは、母親あるいは周りの遊び友だちの言語、すなわち純粋なジャワ語を使ったはずである。時を経てこのようなインド人とジャワ人の混血児が増えるにしたがって、日常的に用いるジャワ語に父親から学んだサンスクリット語の単語を混ぜて使う者たちの集団が生まれた。インド人の父親をもつ男の子や女の子がインドの文字の読み書きを父親から可能な限り教わったとしても不思議ではない。このような混血が増えるに従い、初めは実験的に、インドの文字を用いてジャワ語を書き記す者が少しずつ出てきた。このような試みはさしたる困難もなく成し遂げられたであろう。いったん成功し始めると、恐らくジャワ人の中にもインドの文字で読み書きしたいという者が現れたはずである。当初は、文字を学ぶことは、貿易取引をするうえでの特定の個人の利益のために行われた。やがて、ジャワ人よりも高度な学問を有していたインド人たちが自分たちの学問をジャワ人に教えるようになってからは、ジャワ人の方でもインドの学問を必要と感じ、熱心に吸収しようと努めた。その当時、学問と呼ばれるものはその多くが宗教に関連することであった。このような経緯で、多くのジャワ人がインドの宗教に入信するようになった。第一には、学問に魅了されたためであり、第二には、インド人との混血が増えたためである。混血児と土着のジャワ人との差異は次第にほとんど無くなっていった。

初めてジャワにやってきたインド人は、シワ教を信奉する人々であった。つまり、ブラフマー神、ウィシュヌ神、シワ神を一体の三主神（トリムールティ trimūrti）として崇

め、その中でもシワ神を最高神としていた。現在のジャワではシワ神はグル神と呼ばれている。⁽⁹⁾

次に到来したインド人は、大乘仏教を信仰していた。

これら二つの集団は、ジャワ人あるいは混血児に対して、それぞれの宗教をより広くより深く伝えるために、それぞれの宗教経典を持ち込んだ。これらの経典はサンスクリット語でのみで記されていたようである。そのため、サンスクリット語を学ぶジャワ人も少なからず現れた。インド由来の学問を修めたジャワ人たちは、まだサンスクリット語に通じていない自民族に対して、義務と感じて、あるいは、希望して、教えにあたった。その際にはジャワ語が使われることになったが、それはサンスクリット語混じりのジャワ語であった。つまり、ジャワ語の語彙にない概念や事柄を説明するためにはサンスクリット語の語彙が必要とされたのである。

さらに、当時の背景として、サンスクリット語に習熟していることが、教師や知識人となるための必須の条件であったであろうことも、ジャワ語にサンスクリット語の語彙がかくも大量に流入することを促した。しかし、ジャワ語は根本的にサンスクリット語と異なった特徴を有しているため、サンスクリット語の単語が洪水のように流入してきたとしても、ジャワ語としての独自の形態をもち、インドネシア語族に属することには変わりはない。一方、サンスクリット語はその形態において、現在のヨーロッパの諸言語と比較すると、ゲルマン諸語に類似している。実際、サンスクリット語は、多くのヨーロッパ系の言語と同じくインド・ゲルマン語族に属するのである。⁽¹⁰⁾

大乘仏教を信仰するインド人たちによってもたらされた文献の内容は、ボロブドゥール遺跡の壁面浮彫に描かれた経典が示すような宗教的内容であったはずだが、現在ではそのうちのほとんどが消失しており、本書で解説できるのはほんのわずかにしかすぎない。⁽¹¹⁾

反対に、シワ神を信仰するインド人によってもたらされた文献は現在でも数多く残されている。例えば、『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』などである。現代ジャワ語ではアビヤサ (Abiyasa) と呼ばれている聖仙ウィヤーサの作と伝えられている叙事詩『マハーバーラタ』はパランダワ兄弟とコーラワ兄弟の戦いを描いたものである。⁽¹²⁾ ジャワに流入したのちにワヤン・プルワの演目となった。⁽¹³⁾ ただし、多くの改変や追加も行われている。

叙事詩『ラーマーヤナ』は聖仙ワールミーキの作とされ、『マハーバーラタ』よりも

さらに古い時代の成立であるとの説が有力である。『ラーマヤナ』はインドにおいてはウィシュヌ派の聖典とされている。⁽¹⁴⁾ 一方の『マハーバーラタ』はシワ派の聖典とされる。

話は逸れたが、ここでまたジャワ語に関する話に戻る。ここで述べてきた「ジャワ語」とは古来のジャワの人々によって用いられた言語のことを指す。現代のジャワ人はこの言語を「カウイ語」と呼ぶ。しかし、オランダ人の研究者たちはこれを「古ジャワ語」と呼ぶ。⁽¹⁵⁾

この古ジャワ語が初めて文字に記録されたときには、すでにサンスクリット語の語彙がかなり含まれていたようだ。このサンスクリット語の語彙を含んだ最古のジャワ語の石碑は、サカ暦731年（西暦809年）の年号をもち、ディエンに存在している。⁽¹⁶⁾ 当時から現在に至るまで、ジャワ語は常にインドの文字によって記されてきたと言ってよい。当然のことだが、時を経るに従って、文字の形は、インドの本来の形から、現代において使われている形に大きく変化を遂げた。この変化は少しずつ起こったのである。

ジャワ語が記録された媒体で間違いなく古代に由来するものとして、石碑や銅板がある。⁽¹⁷⁾ 他に、金板や銀板のものもある。石や銅に残された記録の多くは布告である。すなわち、ある王がある村に対して自立する権限を認可する、つまり一定の「自治」を認可するものである。具体的には、政府に支払う税を免除されること、村の住民から税を徴収すること、村の近辺におけるあらゆる種類の事業活動に対して課税したり、商品の運送に対する通行税を徴収したりすることなどが含まれる。

上で述べたような権限が認可されるには、それなりの理由があった。多くの場合、その村には、権限の代わりとして、王が参詣する寺院を保護したり維持したりする義務や、宗教教育施設を設立する義務が課せられた。⁽¹⁸⁾

また、このような義務が課せられていない場合には、たいていその村に王に対する格別な功績があったことが理由とされた。例えば、戦いに際して村人が積極的に王に加勢し勝利に貢献したといったことである。つまり、自治はその褒美として与えられたのである。

さらにまた、石碑や銅板に残された記録には、借用証書や土地の売買証書などもある。

一方、金や銀の板に残された記録の多くは賛美文や呪文であり、これらは遺灰を納めておく銀の壺の中から発見されることが多い。この壺はたいてい寺院の地下に埋められている。これは先に述べた説明とも関連がある。すなわち、自治の許可を与えられた村

には寺院を維持する義務が課せられたが、これは、王の祖先の墓を守るという義務が課せられたということなのである。

上で述べたような慣習は、元来インドの慣習であったものを当時のジャワの人々が真似て取り入れたものである。インドとジャワの血が混じった結果、インドの宗教や感覚がジャワの上流階層の間に深く浸透したのである。このことから、現代では、当時のジャワの人々を指してヒンドゥー・ジャワ人と呼んでいる。⁽¹⁹⁾

第1章 古い時期の古ジャワ語文献

石や銅や金などの媒体に残された記録は、当然のことながらいずれも簡略な事柄しか述べていない。仮に物語や教義や規則など分量のあるものが銅板に記されたとすれば、その枚数は膨大となり、作成に費用がかかるうえに、重くなって持ち運びにも不便である。費用を抑え、持ち運びできるように、分量のある文献はオウギヤシの葉に記録された。⁽²⁰⁾ 当然ながらオウギヤシの葉には数世紀も残るような耐久性はないが、一般にこれらの文献は何度も書き写されてきたので、数世紀前に内容が書かれた可能性のある文献が現在でも残っているのである。それらは以下の文献である。

1 チャンダ・カラナ⁽²¹⁾

本書はオウギヤシの葉に記されている。内容は、カカウインの教則およびインド式に配列された辞書である。⁽²²⁾ 現代のジャワ語の文献で言えば『ダサナマ』(Dasanama)に類似している。⁽²³⁾

本文中に、サカ暦700年(西暦778年)頃にカラサン寺院を建立したシャイレンドラ朝の王の名前が言及されていることから、⁽²⁴⁾ 本書はジャワ文学史中、最古の文献であるとされる。

2 ラーマーヤナ⁽²⁵⁾

この作品は古ジャワ語によるカカウインの形式で書かれている。オランダ人の学者のなかには、ストウツテルハイム博士(『ラーマ物語の諸伝承』Ramalegenden)をはじめとして本書を研究した者がいる。この作品の成立年代については何人かの学者が論じているが、ここでは、言語の比較やジャワで出土した石碑や銅板刻文の記録との比較から判断すると、サカ暦820年—832年(西暦898年—910年)頃に東部ジャワと中部ジャワを

支配したバリトゥン (Balitung) 王の時代に成立したとされるとだけ述べておく。

この『ラーマーヤナ』は、ラーマ王の生涯を描いた物語で、「はじめに」で言及したインドのワールミーキ作の『ラーマーヤナ』と類似しているが、少しばかり異なった部分もある。古ジャワ語版『ラーマーヤナ』をワールミーキの作品と比べてみると、きわめて短い。ワールミーキ作の『ラーマーヤナ』は古ジャワ語版『ラーマーヤナ』の原典ではない。⁽²⁶⁾

『ジャワとバリの文献におけるインドの影響』(Indian Influence on the Literature of Java and Bali) を著したインド人研究者ヒマンス・ブサン・サルカルは、その著書の中で古ジャワ語版『ラーマーヤナ』からいくつかの文を引用している (Sarkar 1934)。別の研究者マノーモーハン・ゴッシュは前述の引用部分は古代インドの偉大な詩人バツティ (Bhatti) の作品『ラーヴァナヴァダ』と一致しているとした (Gosh 1936)。⁽²⁷⁾ さらにまた、彼によれば、古ジャワ語版『ラーマーヤナ』の作者はサンスクリット語を理解していたという。よって、古ジャワ語版『ラーマーヤナ』の作者はサンスクリット語ができなかったとするオランダの学者たちが主張する説は誤りである。

『サリディン』(Saridin) と題された文献によれば、⁽²⁸⁾ 古ジャワ語版『ラーマーヤナ』はマムナン国のデンドラヤナ王の治世の宮廷詩人であるムプ・プユワ (Puywa) によって著されたとされる。⁽²⁹⁾ しかし、これについてはくどくどと述べるまでもなく、まったくの戯言であると言うだけで十分であろう。

バリの伝承によれば、ヨーギーシュワラ (Yogīśwara) という作者がサカ暦1016年 (西暦1094年) に著したとされるが、⁽³⁰⁾ これも正しくはない。前述したように古ジャワ語『ラーマーヤナ』はサカ暦825年 (西暦903年) 頃に成立したものである。ヨーギーシュワラを作者名とするのは誤解である。たしかに、本書の結末部分にはヨーギーシュワラという記述があるが、これは人名ではない。問題の部分には、sang yogīśwara śiṣṭa, sang sujana śuddha manah ira huwus mace siraとあり、訳すと「このラーマーヤナを読了することにより、賢僧はさらに賢くなり、有徳者は心の穢れが祓われる」となる。⁽³¹⁾ ここでヨーギーシュワラ (Yogīśwara) が人名でないことは明らかである。したがって、実のところ作者については未だ不明なのである。

物語の内容は大変にすばらしい。数多くの教義が盛り込まれているほか、文彩も美しく、言葉使いは力強い。私の生涯において、言語の面で『ラーマーヤナ』に匹敵するほどのジャワ語の作品は未だ読んだことがない。

この作品は、1900年にすでにケルン博士によってジャワ文字で出版され、ユインボル博士による注釈の形をとった語彙集もすでにある。現在ではオランダ語への翻訳も完成している。⁽³²⁾ 翻訳の最初の6章はケルン博士によって、残りはユインボル博士によってなされた。しかし、指摘しておかなければならないのは、この翻訳は、本来の意味に基づいて訳すべき部分をまだ多く残しており、読者を魅了するにいたらないことがしばしばあるため、まだ満足いくものではないということである。

私がこのように言うのも、けっして二人の先学の古ジャワ語研究への功績を貶そうとするわけではない。ただ、このように美しい作品に対して満足いく翻訳が行われていないことを嘆かわしく思う気持ち故のことである。私がこう述べるのも、ジャワ人の同胞諸氏の意欲を掻き立て、さらにまた、ジャワ語の諸文献については研究されるべきことが多くあることを伝えたいためである。それを行うのは他ならぬジャワ人自身でなければならない。なぜなら、もし研究を行うのがジャワ人でなければ、いかなる場合でも、心に響かせることは不可能だからである。しかるに、昨今の状況は憂うべきである。ジャワ人の同胞諸氏は、この高貴で価値のある、精神生活の糧とするにふさわしい、祖先からの文化遺産を自分たちが有していることをまったく知らないと言わざるをえない。『ラーマーヤナ』についてすべてをここで語ろうとしたら、話が尽きることはないだろう。

他の文献を紹介する前に、本文学史は文献の分野ごとにではなく、年代の古いものから順に配列してあることを明確にしておきたい。年代が記されている文献については問題ないが、年代が本文中に明記されていないものについては、文献の中で言及されている王の名やその他の特徴的な手掛かりから判断することとした。

『ラーマーヤナ』に続いて古いとされる古ジャワ語文献は次のものである。

3 サンヒャン・カマハーヤーニカン⁽³³⁾

この文献は韻文ではなく散文で書かれている。本文の結末部分にはサカ暦851年—869年（西暦929年—947年）に東ジャワを治めたシンドク（Siṅḍok）王の名が言及されている。

内容は、大乘仏教の教理を含んでいる。多数のサンスクリット語の文が古ジャワ語で解説されている。その大部分は、大乘仏教における諸仏の分類構成の説明であり、ポロブドゥール寺院における諸仏の配置と多くの場合一致している。そのほかに、瞑想する

信者のための指針などが記されている。すでにカツ博士によってラテン文字への翻字にオランダ語の注釈と十分な解説が加えられたものが出版されている。⁽³⁴⁾

4 ブラフマーンダプラーナ⁽³⁵⁾

この文献は散文で書かれている。年代や王名は記されていないが、構成や言語から、『サンヒャン・カマハーヤーニカン』と同年代であると推測される。両者の違いは、『サンヒャン・カマハーヤーニカン』が大乗仏教の文献であるのに対し、『ブラフマーンダプラーナ』はシワ信仰の文献であることである。

内容は多様で、例を挙げると、序文、ローマハルシャナ (Romaharṣaṇa) の物語、世界の創成についての知識、自然界の状況、聖仙 (ṛsiリシ) たちの系譜、ダクシャ (Dakṣa) 王が行った供犠について、カースト制の身分についての説明 (ブラーフマナ、クシャトリヤ、ワイシャ、シュードラ)、人生の修行の段階について (梵行期、家住期、林住期、遊行期)、ユガの時代区分について、ウェーダとその説明、聖仙ヤージュナワルキヤ (Yajñawalkya) の物語、地上界に降り立ったマヌたち、ウェーナ (Wena) 王の物語、プリトゥ (Pṛthu) 王と搾乳されて乳を出した大地の物語、大地についての知識、世界についての知識、ガンガー (Ganggā) 女神 (ガンジス川) の降下、太陽の巡行と星々の事柄などである。

上で述べられていることは、全体として統一性を欠いている。また、残念ながら本文には破損している部分が多い。すでにホンダ博士によりラテン文字に翻字され、解説や注釈とともにオランダ語に翻訳されたものが出版されている。⁽³⁶⁾

5 アガスティヤ・パルワ⁽³⁷⁾

この文献は散文で書かれている。⁽³⁸⁾ 構成は『ブラフマーンダプラーナ』に類似しており、同じく多くのサンスクリット語の文を古ジャワ語で解説している。内容は、ドリダーシュ (Dṛdhāsyu) が父アガスティヤ (Agastya) 仙に様々な事柄を尋ねるというものである。その大部分は『ブラフマーンダプラーナ』で語られていることとほとんど一致する。例えば、人が天国に行きあるいは地獄に落ちる原因は何であるのか、数々の悪業とそれがもたらす結果についてなどである。

ホンダ博士によってラテン文字に翻字され、大変に詳細な解説と注釈 (語彙と分析) が加えられたものが出版されている。

東ジャワ地域をサカ暦913年—929年 (西暦991年—1007年) 頃に治めていたダルマワ

ンシャ・トゥグ (Dharmawangsa Těguh) 王の時代にはジャワ語の文学活動が非常に活発化した。「はじめに」で言及した『マハーバーラタ』がサンスクリット語から古ジャワ語に翻訳されているし、『ウッタラカーンダ』についても同様である。ただし、いずれも完訳ではなく簡略化されている。これらの文献についての分析の手始めとしてまず『ウッタラカーンダ』を取り上げる。

6 ウッタラカーンダ⁽³⁹⁾

この作品は散文で書かれている。サンスクリット語の文が多く含まれていて、古ジャワ語に翻訳されている。冒頭部分で、ダルマワンシャ・トゥグ王の名が言及されている。内容は、ワールミーキ版『ラーマヤナ』の最後の部分（第9巻）が出典である。なお、この部分は先に述べた古ジャワ語版『ラーマヤナ』には含まれていない。専門家たちの見解によれば、『ウッタラカーンダ』は後代になって創作された作品である。物語の内容は多岐にわたる。ラクシャサたちの誕生、ダシャムカ (Daśamukha、ラクシャサの王ラーワナの別名) の祖先、ダシャムカの誕生と神々や仙人たちに対する敬意を欠く彼の態度などである。アルジュナ・サハスラバーフ (Arjuna Sasrabāhu) の物語もこの作品の中に含まれている。⁽⁴⁰⁾

中心となる物語はシーター姫の生涯についての物語である。すなわち、シーターがアヨーディヤー (Ayodhyā) の都へ戻った際、民衆の間で不満が起こるのである。民衆の声は「シーターはかくも長い間、敵のもとにいたではないか。どうして今さら受け入れなければならないのか。」というものだった。ラーマ王は民衆の要求に屈して、シーターを別離し追放したが、実はそのときシーターはすでに身ごもっていた。シーターは、悲しみにくれつつ、隠者の庵にあって、双子を出産し、それぞれクシャ (Kuśa) とラワ (Lawa) と名付けた。物語によると、聖仙バールミーキ (Bālmiki、ワールミーキ) は、この二人に父であるラーマ王の生涯について語ってきかせ、それがのちに『ラーマヤナ』としてまとめられたとされる。さて、そののちシーターは再び宮殿へと呼び戻されたが、その時、大地が開いてシーターは降下していった。地面は再び閉じられ、シーターは亡くなった。程なくしてラーマ王も崩御した。

7 アーディ・パルワ⁽⁴¹⁾

この作品も『ウッタラカーンダ』と同じく散文である。同様にダルマワンシャ・トゥグ王の名が言及されている。この作品は『マハーバーラタ』全18巻の第1巻に相当する。

物語の内容は多様で、ワヤン（影絵芝居）の登場人物の若き頃や誕生にまつわる出来事などが語られる。ワヤンの演目として知られる『デウィ・ララ・アミス』（Dewi Lara Amis）、『バレ・シ・ガラガラ』（Bale si Gala-gala）、『マティニャ・アリンバ』（Matinya Arimba）、『ブルン・デワタ』（Burung Dewata）などは『アーディ・パルワ』を出典としている。

乳海を攪拌して「生命の水」（amṛta、アムリタ）を生み出す説話や、太陽と月が頭だけの怪物によって呑み込まれることで日蝕と月蝕が始まったとする説話もこの作品に収められている。

この作品は、ハズー博士によりサンスクリット語版『マハーバーラタ』と比較参照した上で、ラテン文字への翻字がすでに出版されている。のちにケルン博士によっていくつかの引用が分析された。ガルダの物語はユインボル博士によってオランダ語に翻訳された。

8 サバー・パルワ⁽⁴²⁾

この作品は散文で書かれており、『マハーバーラタ』の第2巻にあたる。しかし、破損部分が多くこれ以上研究を進めることは不可能である。内容はワヤンの演目『パンドワ・ダドゥ』（Pandawa Dadu、パランダワのサイコロ賭博）に対応する。

9 ウィラータ・パルワ⁽⁴³⁾

この作品は散文で書かれており、『マハーバーラタ』の第4巻にあたる。パランダワたちが素姓を隠しながらウィラータ（Wirāta）王に仕えている場面である。というのは、もし素性がばれてしまえば再び12年間の追放に処せられることになっているからである。

ユディシュティラ（Yudhiṣṭhira）はカンカ（Kangka）と名乗るブラーフマナ（婆羅門）に、ビーマ（Bhīma）はバッラワ（Ballawa）と名乗る料理人兼武術師範に、アルジュナ（Arjuna）は舞踊や歌を教える宦官に、ナクラ（Nakula）は馬番、サハデーワ（Sahadewa）は牛番となった。ドローパディー（Dropadī）はサーランドリー（Serandhri）と名乗って香水と膏薬を作った。⁽⁴⁴⁾

ウィラータの王国での重要な出来事は、宰相キーチャカ（Kīcaka）の死と、アルジュナの息子であるアビマニュ（Abhimanyu）とウッターリ（Uttari）の結婚である。このエピソードは『ジャガル・アビラワ』（Jagal Abilawa、ビーマの別名）というワヤンの演目となっている。

『ウィラータ・パルワ』は、ダルマワンシヤ・トゥグ王の名に言及するほか、サカ暦918年（西暦996年）の年代を記している。この作品は、すでにユインボル博士によってラテン文字に翻字されて出版されている。さらに最近になって、前半部分がA. A. フォッカー博士によってオランダ語への翻訳と解説を付けて出版された。

10 ウドヨーガ・パルワ⁽⁴⁵⁾

この作品は散文で書かれている。『マハーバーラタ』の第5巻にあたり、バーラタユッタ（バラタ族の戦争）の戦いを目前にした時の物語である。本文には破損部分が多い。

このため一部のみがユインボル博士によりラテン文字に翻字され、オランダ語の解説が加えられて出版された。内容は多様だが、『クルスナ・グガッ』（Kresna Gugah、クルスナの覚醒）以外にワヤンの演目となったものはない。

11 ビーシュマ・パルワ⁽⁴⁶⁾

この作品は散文で書かれている。『マハーバーラタ』の第6巻にあたり、すでにバーラタユッタの戦争が始まっている。『バガワットギーター』（Bhagavadgītā）の引用はこの文献にある。『ビーシュマ・パルワ』は、ホンダ博士によってオランダ語の注釈とともに出版されている。

12 アーシュラマワーサ・パルワ⁽⁴⁷⁾

この作品は散文で書かれており、『マハーバーラタ』の第15巻に相当する。この物語では、バーラタユッタの戦争のあと、ドリタラーシュトラ（Dhṛtarāṣṭra、コーラワ兄弟の父）は15年間ハスティナ（Hastina）の王となった。⁽⁴⁸⁾ これは息子たちと家族をすべて失った彼に救いの手を差しのべるためである。ドリタラーシュトラが死んだ息子たちへの思い出に囚われないようにとの配慮から、パーンダワたちは彼にかしずいて忠誠を尽くし、褒め称えた。しかしビーマだけはドゥルヨーダナ（Duryodhana、コーラワ兄弟の長男）に辱めを受けたことを決して忘れられなかったので、ドリタラーシュトラの処遇に不満だった。回りに人がいないときに、ビーマはドリタラーシュトラを痛烈に罵倒し、その激しさは、我を忘れているかのごとくであった。これまでの過ちを指摘し、かつて彼によって傷つけられた人たちに賞讃されて喜んでいるのかと非難した。ついには、動揺したドリタラーシュトラは、王宮を去って森に住むことの許しをユディシュティラに求めた。結局、その後、ドリタラーシュトラは年老いたウィドゥラ（Widura）、ガンダ

リー (Gandharī)、クンティ (Kuntī) に伴われて王宮を去った。⁽⁴⁹⁾ ドリタラーシュトラが森の隠棲所にいる時にパーンダワたちが訪ねたこともあったが、ほどなくして彼は死去した。

13 モーサラ・パルワ⁽⁵⁰⁾

この作品は散文で書かれており、『マハーバーラタ』の第16巻にあたる。マドゥラ (Madura) - ドワーラワティー国 (Dwārawatī) のウリシュニ (Wṛṣṇi) 族とヤドゥ (Yadu) 族の破滅やバラデーワ (Baladewa、クリシュナの兄) とクリシュナ (Kṛṣṇa) の死を描いている。(Ra⁵¹)

あるときナーラダ (Nārada) 仙が数人の聖仙と共にドワーラワティー国を訪れようとした。⁽⁵²⁾ その時、サーンバ (Sāmba、クリシュナの息子) が女装して、ワブル (Wabhrū) の妻のふりをした。⁽⁵³⁾ そして、サーンバの仲間たちは、子どもが生まれる時になったら、いったい何が生まれてくるのか (つまり、男の子か女の子か) を聖者に尋ねた。聖者は自分がもてあそばれていることに気づき、怒って、こう言った。「やがて生まれてくるのは棍棒 (mosala) で、あなた方はそれによって滅ぼされるであろう。」

この予言は的中し、サーンバは鉄の棍棒を産み落とした。そこで、鉄の棍棒は粉々に砕かれて、海中へばら撒かれた。さらに、バラデーワとクリシュナは人々に酒を飲むことを禁じた。

やがて、死の神カーラ (Kāla) がドワーラワティー国に到来した。これは破滅の前兆であった。ウリシュニ族は破滅を避けるために海辺で共食儀礼を開くよう命じられた。その儀礼の場で彼らは酒を飲んでしまった。酔いが回り、激しい口論が始まった。サーティヤキ (Sātyaki) はクリタワルマン (Kṛtavarman) に対して、バーラタユッダの戦いの時に一人戦闘の場から逃げたことをからかい、あげくに殺してしまった。⁽⁵⁴⁾ 結論を急げば、一族の喧嘩は一段と激しさを増し、皆が木の枝をとってきて殴り合うと、枝は鉄の棍棒へと変化し、このような次第で、ついにウリシュニ族は全滅した。

クリシュナが瞑想修行中のバラデーワを訪ねると、バラデーワは息を引き取る間際であった。彼が最後の息を吐き終えるのと同時に一匹の蛇が口から出て、海に逃げ出すと、蛇の仲間達に迎えられた。⁽⁵⁵⁾ その後、クリシュナは木の枝の上に横たわり瞑想していたが、猟師の放った矢に倒れ、死ぬこととなった。ドワーラワティー国に残された人々のある者は死に絶え、ある者は森での瞑想に入った。

14 プラスターニカ・パルワ⁽⁵⁶⁾

この作品は散文で書かれており、『マハーバーラタ』の第17巻に相当する。パーンダワ兄弟は、パルクシット (Parikṣit) をハスティナの王位に就け、クリパ (Kṛpa) の指導の下で国を治めさせると、自分たちは瞑想修行をするために旅立った。一匹の犬が彼らに付いて行った。パルクシットも軍隊を引き連れて彼らを見送ったのち、宮殿に戻った。

パーンダワたちが旅を続けて海に至ると火の神アグニ (Agni) が現れ、アルジュナに弓矢を海へ投げ捨てるよう命じた。その後、海岸に沿って旅をつづけ、砂漠を超えてヒマラヤ山に登った。そこでドロパディーは倒れて死に、サハデーワ、ナクラ、アルジュナもそれに続き、最後にはウリコーダラ (Vṛkōdara、ビーマの別名) も死んだ。

インドラ神 (Indra、神々の王) は天国へ入るようにとユディシュティラを招いた。ユディシュティラは犬を同伴することを条件にそれに同意した。すると、その犬はダルマ神 (Dharma、正義の神) に姿を変えた。ユディシュティラはこの世の肉体のままで天国に入った。ところが、天国に着いたものの、弟たちや妻ドロパディーに出会うことはなかった。そこで、彼らに再会しようとして捜し出そうとした。

最後に挙げた3つの作品は、ユインボル博士によりすでにラテン文字に翻字され、オランダ語訳されたものが出版されている。しかし残念なことに元の写本には破損が多い。

15 スワルガローハナ・パルワ⁽⁵⁷⁾

この作品は散文で書かれており、『マハーバーラタ』の結末部分である第18巻に相当する。物語は以下のとおりである。ユディシュティラはドゥルヨーダナが天国で歓待されていることを知った。彼は弟たちの居場所を探し求めて、神々の指示により、使者に案内されて地獄へと向かった。彼が地獄で目にしたものは、あらゆる種類の拷問とそれを受ける者たちの呻き声であった。やがて明らかになったのは、拷問を受け呻吟しているのはなんと自分の弟たちや親族だったのだ。ユディシュティラは神々の不公平な仕打ちに激怒した。使者を天国に帰すと、自分は地獄から立ち去ろうとしなかった。やがて、そこに神々が現れると、地獄は天国に変わった。パーンダワたちは、師匠であるドロナをはじめとする者たちを裏切った罰として地獄で拷問を受けていたのである。しかし、今や彼らは罪から解放されたのだ。

『スワルガローハナ・パルワ』のあと、もう1点、この章で触れて置かなければならない文献がある。

16 クンジャラカルナ⁽⁵⁸⁾

この作品は散文で書かれている。言語を吟味してみると、これまでに述べてきたパルワ諸作品と同時代のものである。表記には接尾辞 e のような新しい形態素が見られるが、これは何代にもわたって書き写されてきたからである。基本的にはまだ古ジャワ語に分類される。

この作品は、先に述べた『サンヒャン・カマハーヤーニカン』と同様に、大乘仏教徒が所有する文献であった。物語の内容は、呪いから解かれて人間になることを切望するラクシャサのクンジャラカルナ (Kuñjarakarna) は、五智如来の中心であるワイローチャナ (Wairocana、大日如来) を訪ねる。そこでクンジャラカルナは地獄へまず行きその様子をよく知るよう命令される。ヤマーディパティ (Yamādipati、閻魔大王) が統治する地獄へ行くと、ありとあらゆる刑罰の様子と拷問を受けている罪人たちの様子を目にした。インドラ神の息子でありながら深い罪を犯したプールナウィジャヤヤ (Pūrṇawijaya) を拷問するための釜が準備のために洗われているのを見て、クンジャラカルナは地獄を立ち去り、友人であるプールナウィジャヤヤのもとを訪れ、彼のために地獄の釜が用意されていることを伝えた。その後、クンジャラカルナは再びワイローチャナに謁見し、教えを受けた。すると、クンジャカルナは呪いを解かれて美しい容貌の人間に姿を変えた。プールナウィジャヤヤも同伴して教えを受けた。プールナウィジャヤヤが死んだとき、本来であれば何百年も拷問を受けなければならなかったものが10日のみに軽減されたうえ、魂は再び同じ体へ戻り、妻のクスマ・ガンダワティーと再会することができた。

この作品はすでに2度、ジャワ文字とラテン文字への翻字が出版されている。両者ともケルン博士によるオランダ語の注釈が加えられている。

本文にはすでに損なわれた箇所も多いが、子細に見直すならば、まだ改善の余地がある。

第2章 古い時期の古ジャワ語文献：韻律形式の古ジャワ語文献

第1章において挙げた文献は、『ラーマーヤナ』および『チャンダ・カラナ』の一部を除き、すべて散文で書かれており、韻文で書かれたものではなかった。ここで韻文と言

うのは、現在ではジャワ語で *tembang gede*（「大きな詩」）と呼ばれているものである。古ジャワ語で使われている韻律はインド由来の韻律の諸規則に従っている。韻律は一定に定まっており、いささかでも変えることは許されていない。

この章で紹介する作品はインド系の韻律形式に倣って書かれたもので、これらは一般的にカカウインと呼ばれている。

17 アルジュナウィワーハ⁽⁵⁹⁾

この作品は、アルジュナが（ヒマラヤ山中で）瞑想修行していた折、ラクシャサの王ニワータカワチャ (*Niwātakawaca*) を殺すよう神々に頼まれたときのことを物語る。これは、「ワナパルワ」 (*Wanaparwa*、森の巻) と呼ばれる『マハーバーラタ』第3巻からの引用である。物語の経緯は非常に有名なので、ここでの説明は最小限にとどめる。

『アルジュナウィワーハ』は、サカ暦941年—964年頃（西暦1019年—1042年）に東ジャワを治めたアイルランガ (*Airlangga*) 王の治世に、詩人ムプ・カンワ (*Kaṇwa*) により書かれた。

クロム博士は、韻律も語りも素晴らしいとして、カンワの技巧を称賛している。だしかにそのとおりではあるが、先に述べた『ラーマーヤナ』と比べたとき、『アルジュナウィワーハ』はあらゆる点でその半分程度である。なぜ『ラーマーヤナ』が称賛されていないかと言えば、その内容と韻律の美しさを本当にわかっている人が未だにいないからである。

『アルジュナウィワーハ』は、1850年にはフリードリヒ博士によりジャワ文字で出版され、⁽⁶⁰⁾ 1926年にラテン文字への翻字が出版された。大部分の意味は明瞭であり、その部分についてはオランダ語に訳されている。⁽⁶¹⁾

18 クリシュナヤーナ・カカウイン⁽⁶²⁾

この作品は、クリシュナがルクミニー (*Rukmiṇī*) 姫と駆け落ちする話が主となる。以下その内容である。

クンディナ (*Kuṇḍina*) 国のビーシュマカ (*Bīṣmaka*) 王の王女であるルクミニーはすでにチェーディ (*Cedi*) 国のスニーティ (*Sunīti*) 王の許嫁となっていたが、王女の母プリトゥキールティ (*Pr̥thukīrti*) は、クリシュナを婿にとりたいたいと思っていた。実のところ、王女自身もクリシュナを好んでいたのがあった。婿選びの祝宴が始まろうとしたとき、クンディナ国のスニーティ王とジャラーサンダ (*Jarāsandha*、カラウィーラ国

の王でスニーティの従兄弟)が到着した。クリシュナは招待を受けていなかったが、プリトゥキールティと王女から、一刻も早く来てくれるよう頼まれた。祝宴開始の賑わいに紛れて、王女はひそかに宮殿を抜け出し、宮殿の南のスリマンガンティ門にたどり着いた。そこでクリシュナに迎えられ、二人は駆け落ちした。

本来婿になるはずであったスニーティ王は、その配下の軍隊と王女の弟ルクマ(Rukma)とともに彼らを追跡し、戦いになった。スニーティ王とルクマは殺されようとしたが、ルクミニ王女がクリシュナに、弟君のために必死に命乞いをしたため、ルクマは殺されずに済んだ。⁽⁶³⁾その後、王女はクリシュナのドワーラワティ国に連れて行かれた。

この物語は、『クルスナ・クンバン』(Kresna Kembang)や『ナラヤナ・マリン』(Narayana Maling、ナラヤナ誘拐す)というワヤンの演目になっているが、これらでは様々な脚色が加えられている。⁽⁶⁴⁾例えば、ワヤンの演目中では、婿はドウルユダナ王(ドウルヨーダナ)の配下のドウルナ(ドローナ)に変わっており、ジャラーサンダとスニーティは全く登場しない。

この作品は、カディリ(Kadiri)王国のワルシャジャヤ(Warsajaya)王の治世のサカ暦1026年(西暦1104年)頃にムプ・トリグナ(Triguna)という詩人によって書かれた。⁽⁶⁵⁾

19 スマナサーンタカ・カカウイン⁽⁶⁶⁾

この作品は、アヨーディヤー国のダシャラタ王(Daśaratha)の誕生にまつわる話である。物語は以下のとおりである。

ある時、トリナウィンドゥ(Tṛṇawindu)仙が瞑想修行をしていた。それを見た神々は、いずれ彼が天界を征服するのではないかと心配になった。神々の王インドラ神は天女ハリニー(Hariṇī)を遣わして、彼を誘惑するよう命じた。しかし、ハリニーはトリナウィンドゥに呪いをかけられ、地上界に落とされてしまった。彼女は、人間に生まれ変わり、ウィダルバ(Widarbha)国の王クリタケーシカ(Kṛtakeśika)の王女インドゥマティー(Indumatī)となった。クリタケーシカ王が崩御すると、その息子ボージャ(Bhoja)が王位を継承した。ボージャ王は妹の王女インドゥマティーのために婿選びの儀式を開いた。⁽⁶⁷⁾

さて、その儀式へ参加するためにラグ(Raghu)王の息子であるアジャ(Aja)という王子がウィダルバ国に向かっていたが、その道の途中で象を殺した。その象はプリヤン

バダ (Priyambada) という天人に姿を変えた。⁽⁶⁸⁾ 救いのお礼として、天女は彼に、ウィモーンハナーストラ (Wimohanāstra) という弓を授けた。

さてウィダルバ国では、アジャ王子の他にも婿選びの儀式に参加する王子たちが集まっていた。マガダ国の王子、アンガ国の王子、アンワンティ国の王子、アヌパ国の王子などの面々であった。婿選びの競技ではアジャ王子が優勝し、婿に選ばれた。アジャ王子がインドゥマティー王女を連れて帰るとき、先ほどの競技で負けた王子たちが道の途中で彼を待ち伏せし、戦いになった。そこで、彼は天女から授かった弓ウィモーンハナーストラを用いて勝利を得た。

ラグ王が崩御したのち、アジャが王位を継承した。しばらくして、息子が生まれ、ダシヤラタと名付けられた。やがて、呪いが解ける時が到来し、インドゥマティーは天界へ帰らなければならなくなった。ナーラダ仙が彼女に向かって花を落とすと、インドゥマティーは死亡した (sumanasaは「花」、antakaは「死」なので、本作品の題名『スマナサーンタカ』、つまり「花による死」となる)。アジャ王は、息子ダシヤラタに王位を譲ったのち、サラユ (Sarayū) 川とガンジス川の合流地を訪れ、そこで息を引き取った。⁽⁶⁹⁾ 天国に至ると、妻のインドゥマティーであった天女のハリニーと再会を果たしたのである。

『スマナサーンタカ』は現在に至るまで出版されていない。⁽⁷⁰⁾ 本作品はワルシヤジャヤ王の治世に編纂された。作者のムプ・モナグナ (Monaguna) は前出の『クリシュナーヤナ』の作者ムプ・トリグナと血縁関係にあるかもしれない。⁽⁷¹⁾ この作品自体は古代インドの偉大な詩人カーリダーサ (Kālidāsa) 作の『ラグヴァンシャ』 (Raghuvamśa) が元になっている。

20 スマラダハナ・カカウイン⁽⁷²⁾

この作品は、カーマ神 (Kāma) の体が焼き尽くされたときの話である。⁽⁷³⁾ 物語は以下のとおりである。

シワ神が (ヒマラヤ山中で) 瞑想修行しているとき、神々の敵であるラークシャサたちがラークシャサの王ニーラルドラカ (Nīlarudraka) に率いられて天界に迫っていた。そこで、シワ神を天界に連れ戻すために、神々は愛の神カーマにシワ神を誘惑して天界へ連れもどすよう嘆願した。カーマ神はシワ神のもとへ行き、幾度となく花の矢を射るなど策を尽くしたが、いずれも無駄に終わった。そこで、ついに聴覚、味覚、触覚、嗅

覚、視覚のすべてに心地よい感覚を引き起こす矢パンチャウィシャヤ (pañcaviṣaya、「五感の対象」の意) を放った。その矢を受けたシワはたちまち妻ウマー (Umā) への恋慕の情に満たされた。しかしシワ神は、このような気持ちを引き起こしたのがカーマ神の仕業であることを見てとると、激怒した。彼が額の真ん中にある第三の眼でカーマを睨み付けると、その目から炎をあげて火が噴き出し、カーマ神は焼き尽くされて死んでしまった。そして、シワ神は天界に帰還した。

さて、カーマ神の妻である女神ラティ (Ratih) は夫が焼き尽くされて死んだと聞き、夫が殺された場所へ行った。シワ神の意思で火は再び燃え上がった。その炎はカーマ神の手の形となり、あたかも妻を抱きしめようとするかのごとく、手招きをした。ラティはその場に着くや、身を犠牲にして火の中に身を投げ入れ命を絶った。

神々はシワ神にカーマ神とその妻の罪の許しを請い、何とか二人を生き返らせたいと願ったが、当のシワ神は断固としてそれを認めなかった。それには、カーマは世の男性の心の中に、ラティは世の女性の心の中に生き続け、永久にこの世界が続くようにとのシワ神の意図があったのである。

さて、天界で久しぶりに再会したシワ神と妻ウマーは長い別離の寂しさを慰め合った。やがてウマーは妊娠した。胎児がまだ小さかったころ、戻ったばかりのシワ神のもとに神々が挨拶に訪れたが、これには別の意図があり、神々はインドラ神の象を連れてきていた。その時、シワ神とウマーは家の中にいたが、巨大な象を見て、ウマーはとても驚愕し、悲鳴を上げ続けた。シワ神は、やがてウマーが子どもを産むとき、その子どもは首から上が象の姿をしたガネーシャ (Gaṇeśa) 神となるが、それも運命の定めだと言って妻を慰めた。象頭人身のガネーシャが生まれたのち、ラークシャサの王ニーラルドラカが天界を襲った。ガネーシャも戦いに加わるよう要請された。戦争はますます激しくなり、規模が大きくなった。最後にはラークシャサの王とその軍隊はすべて殲滅され、神々は歓喜の宴を開いたのであった。

この『スマラダハナ』の本文中にはカディリ王国の王カーメーシュワラ (Kāmeśwara) の名が、カーマ神の3回目の転生として、言及されている。王妃シュリー・キラナラトゥ (Śrī Kiraṇaratu) はジャンガラ (Janggala) 国の出身である。石碑の記録によると、カーメーシュワラ王はサカ暦1037年から1052年 (西暦1115年から1130年) 頃にかけてカディリ国の王位に就いていた。⁽⁷⁴⁾

しかし、サカ暦1108年 (西暦1185年) 頃に在位していたカーメーシュワラ2世という

王もいた。オランダの研究者たちは『スマラダハナ』をカーメーシュワラ2世と関係づけているが、私自身は『スマラダハナ』で述べられているのはカーメーシュワラ1世だと考えている。おそらく、この王こそがパンジ物語の中でヒヌ（ヒノとも呼ばれる）・カルタパティ（HinūもしくはHino Kartapati）として有名な主人公のことであろう。⁽⁷⁵⁾ というのも、パンジ物語中の王妃もチャンドラ・キラナ（Candra Kirana）姫であり、キラナという名をもつからである。

『スマラダハナ』ではジャンガラ国の王女がカディリ国の王と結婚しているのに、パンジ物語ではカディリ国の王女がジャンガラ国の王と結婚しており、国が逆になっているが、これは大きな問題ではないだろう。

『スマラダハナ』の作者はムプ・ダルマジャ（Dharmaja）である。1931年にこの作品はラテン文字に翻字されるとともに、本文のうち意味の明らかな大部分がオランダ語へ翻訳され出版された。⁽⁷⁶⁾

21 ボーマカーウィヤ・カカウイン⁽⁷⁷⁾

この作品はクリシュナとボーマの戦いを描いたものである。物語は次のとおりである。

クリシュナのもとをナーラダ仙が訪れ、ラークシャサの王ボーマが派遣したラークシャサの軍隊が天界を包囲しているので、撃退してくれるよう請うた。そこで、サーンバ（クリシュナの息子）に軍隊を率いて出陣するように命令が下された。彼らがヒマラヤ山の麓に着くと戦闘が始まり、ラークシャサたちは全滅した。

さて、そこにはすでに住む人のいない荒れた修行道場があった。サーンバはその修行道場のいにしえの来歴を知ろうと、ウィシュワミトラ仙の弟子であるプトゥ・グナデーワという人物に尋ねた。グナデーワによると、それは、ウィシュヌ神の息子ダルマデーワ仙の修行道場の跡であるとの答えであった。ダルマデーワの死後、妻のヤジュニャワティー（Yajñawatī）が引き続きそこで修行を続けたが、間もなく彼女も夫の後を追って亡くなった、ということであった。そこでサーンバの脳裏をよぎったのは、そのダルマデーワこそが、前世の自分であったということである。同時に、妻のヤジュニャワティーを恋しく思う気持ちもよみがえった。そんなこんなで、サーンバの心が混乱しているところに、天女ティロータマー（Tilottamā）が来訪した。天女によれば、ヤジュニャワティーは現在ウタラナガラ国の王女として生まれ変わっていて、その名も以前と同じヤジュニャワティーである上、両親はボーマというラークシャサの王の攻撃により

死亡し、王女は現在ボーマによって囲われているということだった。

サーンバは、天女ティロータマーに案内されて、秘かにヤジュニャワティーのもとに忍び込んだ。宮殿に着くと、王女に会うことができたが、周囲の知るところとなり、再び戦いとなった。ラークシャサたちは逃げ出したが、しかし、混乱のさ中にボーマも参戦し、ヤジュニャワティーはもう一つの宮殿であるプラジョーティサに連れ去られてしまった。

(ボーマの最初の) 宮殿に戻ったサーンバは、ヤジュニャワティーを失った悲しみのあまりくらくらとなってしまった。まもなくナーラダ仙が現れ、その場所は危険だからドワーラワティー国へ戻るよう諭した。

サーンバは故国へ戻ったが、そのまま病に伏してしまった。そのときクリシュナ王も現れ、息子が病気との報告を受けたが、心静かに落ち着いていた。間もなくして、ある神がクリシュナのもとを訪れ、天界を打ち負かそうというボーマの企てがますます切迫しているので、助けを求めた。クリシュナが戦場に向かい、ボーマは敗れた。ボーマは戦死し、その遺体は海に投げ込まれた。最後に、サーンバはヤジュニャワティーとの再会を果たしたのであった。

この『ボーマカーウィヤ』の作者ははっきりしていないが、本書の冒頭部分に登場する、カーマ神に対する賛美の言葉などが『スマラダハナ』中にあるものと類似していることから、ファン・デル・トゥーク博士は、『ボーマカーウィヤ』は『スマラダハナ』と同時代に記されたものであると推測している。使用されている言語や韻律についても、この推測と矛盾することはない。

『ボーマカーウィヤ』はフリードリヒ博士によって1852年にジャワ文字で出版された。1946年にはテーウ博士がオランダ語に翻訳を行った。

22 バーラタユッタ・カカウイン⁽⁷⁸⁾

『バーラタユッタ』はジャワ語の諸文献の中で最も有名な作品である。物語はパランダワたちとコーラワたちの戦いを語っている。この物語については周知のことと思うので、ここで繰り返す必要はないであろう。

この作品はカディリ王国のジャヤバヤ (Jayabhaya) 王の治世のサカ暦1079年 (sanga-kuda-suddha-candramā 9-7-0-1、西暦1157) に書かれた。⁽⁷⁹⁾ 石碑の記録によるとジャヤバヤ王はサカ暦1057年から1079年 (西暦1135年-1157年) 頃に在位していた。

作者は2名の宮廷詩人である。冒頭からシャルヤ王 (Śalya) の出陣までがムプ・スダ (Sēdah)、それ以降はムプ・パヌル (Panuluh) によって書かれた。

次のような言い伝えがある。ムプ・スダは、シャルヤ王の王妃サティヤワティー (Satyawatī) の美しさを描こうとしたとき、成功させるためにモデルを必要とした。⁽⁸⁰⁾ そこでジャヤバヤ王の許しをえて、その王女がモデルとなった。しかし、ムプ・スダの態度は礼節を欠くと非難され、殺されてしまったという。

ただ、ムプ・パヌル自身の言葉によれば、事情を次のようであった。ムプ・スダは、本作においてシャルヤ王が戦いに出陣する部分までをほぼ書き終えたとき、続きを書く意欲を失ってしまった。そのためにムプ・パヌルが続きを書くように頼まれたというものである。以上の話は『バーラタユッタ』の最後に書かれている。

フニン博士によれば、この『バーラタユッタ』中で使用される言語や韻律は古代ギリシャ人の詩に肩を並べるものであるという。筆者にはこの点を検討することはできないので、そのようなものとしておきたい。しかし、言語と韻律の美しさについては同意したく思う。

現在でもワヤンのスルクにはこの『バーラタユッタ』から取られた文言が数多く使われているが、これらの文言はかなり崩れたものになっている。⁽⁸¹⁾

この作品は、1903年にフニン博士によりジャワ文字で出版された。オランダ語への翻訳は近年 (1934年) になってようやく雑誌Djawa (第14巻第1号) の中で出版された。

23 ハリワンシャ・カカウイン⁽⁸²⁾

この作品も、ジャヤバヤ王の治世期のムプ・パヌルによる作品である。物語は、先に述べた『クリシュナヤーナ』(本書18番) とほぼ同様だが、多少の違いがあるので、ここで内容について解説する。

まず初めにはドワーラワティー国の美しさが語られる。庭園にいるクリシュナのもとにナーラダ仙がやってきて、シュリー女神がクンディナ国のビーシュマカ王の王女ルクミニーとして転生していることを告げた。そのルクミニーは、ジャラーサンダ王という強大な王の意思により、チューディ国のチューディヤ (Cedya) 王のもとへ嫁がされるところであった。

クリシュナにはこの王女を連れ去りたいという思いが募った。そこでプリヤンバダ (Priyambada) という名の家来に命じてクンディナ国の様子を探らせることにした。

ルクミニーの方も同様の気持ちで、ウィシュヌ神の転生と結婚できることを願っていた。現実はその簡単にはいかず大層悲しんでいた。ケーシャリー (Keśarī) という名の侍女は、ルクミニーが愛の荒波に翻弄されていることに気づいていたが、その愛しい人が誰なのかは明らかではなかった。

ある日ケーシャリーが宮殿の外に住む両親を訪問するために、宮殿の外へ出たときに、彼女とは親戚の関係にあるプリヤンバダと出会った。宮殿に戻るとき、ケーシャリーはプリヤンバダから、ルクミニーに渡すようにと言われて、花を持ち帰った。花はクリシュナからの贈り物であり、自作の詩も一緒に添えてあった。ルクミニーはたちまちクリシュナへの恋におちた。恋の火を鎮めるためにルクミニーは毎晩庭園に通ったが、その恋の火はますます大きくなるばかりだった。

一方、ナーラダ仙はジャラーサンダ王に、クリシュナがルクミニーを連れ去ろうとしていることを伝えていた。ジャラーサンダ王はすぐにビーシュマカ王を呼び、その知らせを伝えた。ビーシュマカ王は、ルクミニーをすみやかにチェーディヤ王と結婚させよと命じた。チェーディヤ王にも結婚の準備をするようにとの命が下ったので、チェーディヤ王はクンディナ国へ急いだ。

ルクミニーの心はますます落ち着かなくなっていっていった。プリヤンバダに、一刻も早くドワーラワティー国へ戻りクリシュナを呼ぶようにとの命が下った。知らせを受けたクリシュナは急いでクンディナ国へ発ち、プリヤンバダとプラウィーラ (Prawīra、プリヤンバダの弟) がこれに付き添った。プリヤンバダには、ルクミニーの許へ行き、次の真夜中にクリシュナを出迎えるよう伝えることが命じられた。

その頃、クンディナ国の宮殿では祝宴の準備がたけなわであった。やがて、真夜中になるとルクミニーは宮殿から抜け出した。ルクミニーはクリシュナと落ち合い、共に逃げだした。ルクミニーの失踪はビーシュマカ王に伝えられた。王は激怒し、あとを追いかけるように命じたが、クリシュナたちはすでに遠くに去ったあとであった。

一方、ウィンダ王、アヌウィンダ王、バガダッタ王、ウィラータ王、シャルヤ王、ブーリシュラワス王、アフカ王、ジャヤドラタ王、ダンタチャクラ王など、賓客の王がすでに顔を揃えていた。この王たちは皆、クリシュナにはシャクティ (śakti、聖なる力) が備わっている事を知っていたので、最善の道を探そうということで同意した。議論の当初では、クリシュナを騙すことが考えられた。ジャラーサンダ王はパーンダワたちに助けを求めようと提案した。ユディシュティラは手助けすることを約束したが、ビーマは

賛成せず、使者を送り返そうとした。アルジュナも同意しなかった。しかしながら、すでにユディシュティラが承諾してしまっていたので、ジャサランダ王を援助せざるを得なくなった。

クリシュナは、かくも多くの王たちが攻めてくると耳にしたため、ウッダワ (Uddhawa) をアマルタ国に遣わし助けを求めさせた。⁽⁸³⁾ しかし、ユディシュティラ王はすでにジャラーサンダ王に協力することを約束していたので、手助けを約束することはなかった。結局、宰相ウッダワは、クリシュナの尋常ならざるシャクティをもってすれば何も心配するには及ばないという言づてを持って帰国した。

さてパーンダワたちはジャラーサンダ王の国であるカラウィーラ (Karawīra) 国へ発った。到着すると、敬意をもって迎えられた。この後、彼らとパーンダワたちは全員ドワーラワティー国へ向けて出発した。コーラワたちもまた合流して力を貸した。

一方、クリシュナは敵を迎え撃つ準備ができていた。ほどなくして激しい戦闘が起こった。バラデーワ王 (クリシュナの兄) は数え切れぬほどの敵を撃ち倒した。ナクラもサハデーワもバラデーワ王によって殺された。ビーマも怒り狂ってバラデーワ王に立ち向かったが、ついに両方とも討ち死にした。3人の弟たちが倒されたのを目の当たりにし、ユディシュティラもクリシュナに戦いを挑んだ。しかし、クリシュナの力によりユディシュティラは石柱のように動けなくなった。今度はアルジュナがクリシュナに挑んだ。クリシュナは、ほとんど倒れる寸前となったところで、ウィシュヌ神に変身した。そこでアルジュナも半身がクリシュナ、半身がウィシュヌ神という姿に変身した。すると、ウィシュヌ神にまみえるべく神々が降臨した。ユディシュティラもウィシュヌ神に平伏し、戦いで散った者たちを生き返らせるよう乞うた。ウィシュヌ神はこれを承諾した。そして、彼らは全員そろってドワーラワティー国へ向かい、クリシュナの結婚式に出席したのであった。

ムプ・パヌルが本作品を書いたのは、『バーラタユッタ』の後半を書き継いでから間もなくであった。『ハリワンシャ』の末尾に記された作者自身の言明によれば、*tambenya n pangikētkw apet lalēh* (当初、私はこの創作で満足を求めた) とのことである。⁽⁸⁴⁾ この当時ムプ・パヌルはまだ若かった。というのも、彼は王の弟子であったと述べているからである。

近年になって、本作品はテーウ博士によって、ラテン文字に翻字され、オランダ語の翻訳と注釈をつけたものが出版されている。

24 ガトートカチャーシュラヤ・カカウイン⁽⁸⁵⁾

この作品も宮廷詩人ムプ・パヌルの作品である。しかし、この作品で言及されている王の名前はジャヤクリタ (Jayakṛta) である。石碑によれば、確かにカディリ王国時代にクリタジャヤ (Kṛtajaya) という王が実在し、サカ暦1110年 (西暦1188年) 頃に在位していた。このクリタジャヤ王はジャヤバヤ王の後継者であるかもしれないが、はっきりとしていない。

『ガトートカチャーシュラヤ』の物語の内容は以下のとおりである。パーンダワ兄弟が12年間の追放の刑を受けていた時、アビマニュはドワーワティー国に預けられていた。このアビマニュは叔父であるクリシュナに対して大変従順で献身的であったため、クリシュナもアビマニュを大変可愛がった。それどころか、アビマニュが娘のクシティ・スンドアリー (Kṣiti Sundarī) と結婚することになったとしても、満足に思っていた。⁽⁸⁶⁾ しかし、あいにく彼女にはすでにハスティナ国のラクシャナ・クマーラ王子 (Lakṣana Kumāra、ユーラワ兄弟の長男ドゥルヨーダナの息子) の許嫁になっていたのであった。当のアビマニュはといえば、王女への恋に落ちていたのである。悶々とした気持ちをほらすために、彼は、しばしば森の中を彷徨することがあった。

ある日、クシティ・スンドアリーも森への物見遊山をしたくなったため、父君の許可をもらい侍女たちと共にでかけた。その時アビマニュも森への物見遊山に同行しており、偶然二度も二人は出くわした。このような偶然が度重なり、クシティ・スンドアリーとアビマニュとの間には熱い恋が芽生えたのであった。

クシティ・スンドアリーは宮殿へ戻ると、早速アビマニュに手紙を送り、ラクシャナ・クマーラ王子と結婚したくないことを明かした。その手紙にはキンマの葉と石灰が添えてあった。⁽⁸⁷⁾

そこでアビマニュはなんとかして王女ともっと長く会えるような方策を探し求めた。そして、瞑想に入ったところ、カーマ神とその妃ラティ女神の訪問を受け、花を与えられた。この花は、後日、アビマニュと王女の逢瀬の際にお守りになるものであった。しかし神とその妃が姿を消す時に、アビマニュは妃の女神ラティに敬礼をしないという誤りを犯した。これが妃の気に障り、呪いを受けることになってしまった。アビマニュが謝罪したので、妃の許しを得ることができた。

その後、アビマニュは、宮殿に入り、クシティ・スンドアリーと逢うことに成功した。しかし、二人の関係は周囲に知れ渡ってしまった。このことを知ったバラデーワは大変

に怒り、アビマニュは追放されてしまった。そこで、アビマニュは従者のジュルディヤ (Jurudyah) を伴い王都を出て、シワ寺院で夜を明かした。するとそこに2人のラークシャサが襲来し、アビマニュとジュルディヤはドゥルガー (Durgā) 女神への生贄として連れ去られた。

アビマニュとジュルディヤは2人のラークシャサによって空を飛んで連れて行かれた。ドゥルガー女神の前に引き立てられたアビマニュは、すすんで女神の生贄となることを望んだ。しかし、女神への献身的な帰依ゆえに、食べられずにすんだ。しまいには、ポールバヤ (Porubhaya) にあるガトートカチャ (Ghatotkaca) の宮殿に行くよう指示された。⁽⁸⁸⁾ 距離が遠いので、2人はさきほどの2人のラークシャサに助けられて、空を飛んで運ばれた。ポールバヤに着くと、庭園の中に降ろされた。その場でガトートカチャの庭守りであるラークシャサと会った。ラークシャサは怒りをあらわにしたが、アビマニュが、平穩を乱す気はなく、ただガトートカチャに会いたいただけであることを説明すると怒りは収まった。そこで、ガトートカチャのところに通されると、ジュルディヤが用件を伝え、ガトートカチャはアビマニュたちの希望がかなうよう援助することに同意した。

婚礼の儀がいよいよ始まろうとする頃、コーラワ兄弟たちが花婿を初め一同揃ってドワーラワティーを訪れた。狼狽したクシティ・スンドリーは、命を捨てる寸前であったが、アビマニュと結婚することができるという神の啓示を受けた。

一方、ガトートカチャたちは軍隊を率いてドワーラワティーを目指して出発していた。ガトートカチャの軍勢はドワーラワティーにほど近い森で止まった。そこからガトートカチャとアビマニュの二人は空飛ぶ車に乗って、ただちに宮殿の庭に着くことができた。そこで二人はクシティ・スンドリーと合流した。王女とアビマニュは、ガトートカチャの命により、すぐにまた空飛ぶ車に乗って宮殿を後にした。ガトートカチャは、万ーラクシャナ・クマーラが来た時には倒そうと考えて、後に残った。そして、クシティ・スンドリーとアビマニュが去ったあと、クシティ・スンドリーに変装した。

一方、バジュラダanta (Bajradanta) というラークシャサがいた。⁽⁸⁹⁾ これは、バカ (Baka) という名のラークシャサの息子で、ビーマによって殺された自分の父の敵を討つ機会を狙っていた。⁽⁹⁰⁾ 彼はガトートカチャの企みをクルパティ (Kurupati、コーラワ兄弟の長男ドゥルヨーダナの別名) に告げた。そして、バジュラダantaはクルパティの許しをえてラクシャナ・クマーラに変装した。偽物の新郎は新婦のもとへと歩み寄った。彼らはお互いとお互いを抱擁しあった。新郎は新婦を殺そうとしたが、新婦の方も同じだった。

しかし、勝利したのは新婦の方であった。ガトートカチャの姿に戻ると、空を駆けていった。コーラワたちは、皆、逃げ出した。

さて、クルパティはバラデーワ王の援軍とあわせて軍勢を招集し、ガトートカチャに支援されたドワーラワティーの軍勢と戦った。コーラワ軍が劣勢となるのがわかると、バラデーワ王はトリウィクラマ (triwikrama) に化身し、⁽⁹¹⁾ 彼の武器である鋤を縦横無尽に突きだした。その様子はダーナワ、デーティヤ、ラークシャサなどの姿となって変化自在であった。⁽⁹²⁾

その頃、ナーラダ仙は森にいるクリシュナのもとを訪れて、国に戻るように伝えた。ようやくクリシュナが兄バラデーワをなだめたので、怒りは収まり、すべての対立も消えた。さらに、アビマニュとクシティ・スンドラーは結ばれることとなった。⁽⁹³⁾

この作品を書いたとき、ムプ・パヌルはすでに晩年の域に入っていた。すでに現世への執着が無くなっていたことは、本文の以下のような記述からも読み取れる。Manggèh sādhana sang kawīśwara n asādhya kalēpasan i sandhi ning mangö (すべての煩惱から離れた私にとっては、作品を書く事がさらに煩惱から放たれるための道具なのである) mon sēnggan apa denya don ika silunglunga ning umuliheng Smarālaya (それを通してカーマ神のいる天界に帰るために備えているのである) antuknyāmrih amöh manah mara silunglunga niki muliheng Ananggabhawana ri nglihnya lēwas ing langö (現世の雑念の中にあるのはもう十分で、今すべきことは、アナンガ (体のない、すなわち、死後の) 世界に行くために備えることである) ⁽⁹⁴⁾

このような言葉は、すでに年取って、生きることに飽きた人間からしか発せられないことは明らかである。

また、この『ガトートカチャ』は、王族が家来 (パナカワン) たちに付き添われるというモチーフが登場する初めての作品である。⁽⁹⁵⁾ アビマニュがドワーラワティーへ行く場面で、彼はジュルディヤ (Jurudyah)、プラサンタ (Prasanta)、プンタ (Punta) に付き添われている。しかし、私は「プンタ」というのは人名ではなく、「我が主」という意味だと推測している。同様にプンタデワ (Puntadewa) も「我が主、デーワよ」という意味で、それがのちにユディシュティラ (パーンダワ兄弟の長男) の別名になったのではないかと推測している。

ファン・スタイン・カレンフェルス (Van Stein Callenfels) 博士によれば、この物語はもともとワヤンの演目だったものがカカウインに改編されたものだと推測されている。

この説には妥当な点が多い。したがって、カディリ時代のワヤンにはパナカワンがすでに存在していたことになる。この点をさらに検討するために、次の作品について論じた。

25 ウリッタサンチャヤ・カカウイン⁽⁹⁶⁾

本書の内容はカカウインについての教えで、韻律の要件や名称について書かれている。94種類の韻律の例が挙げられている。したがって、先に解説した『チャンダ・カラナ』（本書1番）とも似通っている。⁽⁹⁷⁾

韻律の教えに入る前に前置きとして以下の物語が置かれている。ある一人の王女がおり、その王女は夫に置き去りにされた。彼女が庭園に出かけたとき、二羽の鴨に出会った。彼女は鴨たちに夫を探し出すよう助けを求めた。その鴨たちが飛び立って空をとぶことで、森をはじめとする様々な場所の美しさを描く理由が生まれている。

『ウレタサンチャヤ』の作者は、ムプ・タン・アクン（Tan-akung）であるが、ジャワのどの王の統治時代の人物であったかは定かではない。しかしながら、カディリ王国の末期に編纂されたのではないかと推測されている。

本書はケルン博士により1875年にジャワ文字でオランダ語の翻訳をつけて出版された。その後、Verspreide Geschriften第10巻の67ページにおいてラテン文字に翻字されて再出版された。

ここで出版されたものにはジャワ語で次のような説明が付されている：これが、バリ島の物語『ウリッタサンチャヤ』の転写である。その昔、ある聖職者がいた。その娘はダルキ姫という名であったが、その夫は姿を消して行方が分からなくなっていた。ついに彼女は自ら夫を捜すことにし、父母の許しを得ることなく出かけた。道中では、恋慕のあまり嘆いてばかりいた。その時代は、ジャワ島ではクスマウィチトラ（Kusumawicitra）王の治世であった。大きな王宮がカディリにあったが、ブンギン（Pëngging）という場所へまもなく移るところであった。

私はこの部分について長々と説明する必要はないと考える。なぜならば、前述の部分は全くのでたらめだからである。なぜなら、第一に、カディリ王国の都がブンギンという場所に遷都したという事実はなく、第二に、カディリ王国の時代にクスマウィチトラ王という王がいたという事実はないからである。まだ発見されていないだけだという可能性はあるだろうか？

夫に置き去りにされた姫が、夫を捜すよう鴨に頼むというモチーフは『アジパマサ』(Ajipamasa) という作品の第3巻4章から第4巻1章にかけてみられる。なぜ『ウリッタサンチャヤ』の中のモチーフが『アジパマサ』の中に現れるのかは定かではない。

ムプ・タン・アクンの作品にはもう一つ次の作品がある。

26 ルブダカ・カカウィン⁽⁹⁸⁾

作品はある狩人がその死後に天国へ行った話を語っている。通常、ヒンドゥー教、ましてや仏教であれば、狩人というのは卑しく、罪深い人間であるとされている。なぜならば彼らは、人間と同じ生き物であり、仲間である動物を殺すことをまさに日々の生業とするからである。そうでありながらも、ルブダカ (Lubdaka) という狩人は死後に天界に召された。その内容は以下のとおりである。

ある狩人がおり、妻子と共に森で暮らしていた。ある日のこと、彼は狩りに出かけたが、一匹の獲物もなく一日を終えようとしていた。太陽が沈みかける頃、鹿が水を飲みに来るのではないかと池のほとりで待ち伏せしていたが、それも無駄骨であった。そうこうしているうちに太陽は沈んでしまったが、森が暗闇に包まれたため、彼は帰るのが怖くなった。虎などの猛獣に襲われたらということを考えて心細くなったからである。そこで、その森で一夜を明かすことにした。しかし、地面で寝る勇気もなく、池の上に枝が垂れ下がった一本のマジャ (学名 *Aegle marmelos*) の木に登った。その幹の上で寝ることも考えたが、落ちるのが怖かったので、その木の葉を一枚ずつ摘んでは池に落とすことを繰り返して眠気をこらえた。

偶然にも、その池の水中には自然にできた一本のリングがあった。リングはシワ神の象徴であり、また偶然にも、シワ神への崇拝は、リングの上にマジャの葉を載せて行うものが一番良いとされていたのであった。はたまた偶然にも、その夜はシワラートリ (Śivarātri)、つまり「シワ神の夜」と呼ばれる漆黒の暗闇の夜であった。その夜に徹夜で勤行する者は大きな果報を得るのである。そのため、狩人は意図せずして、その夜、シワ神への最高の崇拝をささげていたのであった。

翌朝早くに、狩人は何の獲物も手にしないまま帰宅した。妻子は彼の帰宅をじりじりと待ちわびていたのであった。狩人は疲労困憊の状態で、妻の介抱を受けた。

その翌朝、狩人は妻子のために食糧を探しに森へ出た。このように、生業は常日頃から生き物を殺すことであった。やがて狩人は病にかかり、病は日に日に重くなり、死ん

でしまった。妻子は大声を上げて泣き悲しんだ。遺体は親類によって森の中へ運ばれ、火葬にされた。

さて、狩人の魂は空中をさまよっていた。生きている間の行いが罪深かったせいでその道は暗かった。一方、シワ神は、その狩人に対して大変な好意を寄せていた。以前、狩人が森で一夜を明かした時に、シワ神に崇拝をささげたことがあったからである。そこで、シワ神はその狩人の魂を迎え入れるために使いを遣った。

ちょうどその時、地獄の主であるヤマーディパティ神（閻魔大王）の軍勢も、狩人の魂を地獄に引き取る準備をしていた。魂を迎えるべく地獄の軍勢が出発したが、シワ神の遣いがすでに到着していた。両方の軍勢は、狩人の魂を奪い合って、戦いになった。ヤマーディパティ神の軍勢が敗北し、撤退した。狩人の魂はシワ神のいる天国へ籠に乗せられて運ばれ、そこで褒め称えられた。ヤマーディパティ神がシワ神のもとを訪れて抗議したが、シワ神はこれに対して言葉を尽くして説明を与えた。

ムプ・タン・アクンがこの作品を書いたときは、すでに晩年期であった。この作品の結末部には次のように記されている: *tan sangkeng wruh apet raras rumacana ng wuwus kumawaša byaktāsambhawa yan kasanmataha de nirang parajana mukta ng kleša silunglunganya muliheng nirāśraya juga* (私がこの作品を書いたのは、うわべだけをただうまく飾りたてるためではない。多くの人を惹き付けるためでもない。ただ、来世に備えて現世でのあらゆる罪を消し去るためなのである。)⁽⁹⁹⁾

『ルブダカ』の冒頭部で、ムプ・タン・アクンはギリンドラワンシャジャ (Girīndrawangśaja) 王の名を記している。これはケン・アンロック (Ken Angrok) がトゥマプル (Tumapël) 国の王に即位してからの呼称である。したがって、ムプ・タン・アクンがこの『ルブダカ』を書いたのは、ジャワの王権はすでにカディリからトゥマプルに移っていた時のこと、つまりサカ暦1144年 (西暦1222年) のことである。⁽¹⁰⁰⁾

ムプ・タン・アクンが本書を記した理由については、ケン・アンロックの寵愛を受けるためであったとされる。のちほど本書でも解説する『パララトン』(本書41番)によれば、ケン・アンロックは若いころは大変に罪深い人物で、殺人を犯したり、強盗を働いたり、人の妻を奪ったりと、多々の悪事を働いた。彼が王位に就いたあと、罪深い人間であっても、天国へ行くことができるという物語を描く宮廷詩人があらわれた。これはつまり、ムプ・タン・アクンがケン・アンロックの贖罪を得ようとしたということである。

ここでいったん、古ジャワ語の文献についての解説に一区切り入れることにする。というのは、ケン・アンロック、すなわち、ギリンドラワンシャジャ王の時代は、筆者の見解では、古い時期の古ジャワ語文献と新しい時期の古ジャワ語文献の境界だからである。よってこの『ルブダカ』は古い時期の古ジャワ語文学の中で一番新しいものといえる。では、その特徴とは何だろうか。

すでに述べた成立年代と作中に記述されている王の名前などとは別にして、古い時期の古ジャワ語文献は、言語の特徴から分析することができる。そのほかの特徴として、これらの作品の物語のモチーフはインドの物語に取材していることが明らかである。インドの物語に取材していない要素については、古ジャワ語の文献に取材しているものはみられない。さらに付け加えれば、古い時期の古ジャワ語文学の作品は、作中で名前が挙げられている王に関することを別にすれば、ジャワ土着の事柄については語っていないことである。

註

- (1) ここでの「インドネシア」はインドネシア共和国の意味ではない。語族を指す用法としては、現在では「オーストロネシア語族」の呼称が一般的である。
- (2) 《原註》Bijdrage tot de Vergelijkende Klankleer (博士論文)。
- (3) 《原註》最初の調査はケルン (Kern) 博士、ファン・デル・トゥーク (Van der Tuuk) 博士により実施された。上記論文の3ページを参照。
- (4) 現在では、オーストロネシア語族の故地を台湾に求める説が有力である。《原註》Kern, *Verspreide Geschriften*, 第6巻, p.107.
- (5) 訳註4を参照。《原註》Kern, *Verspreide Geschriften*, 第16巻, p.108.
- (6) 《原註》*Gesch. van Ned. Indië: De Prae-historie*, 1938, p.89.
- (7) ジャワ文字を含む東南アジアのインド系文字は、南インド系のブラーフミー文字に由来する文字に起源を持つ。古ジャワ文字はカウィ文字とも呼ばれている。
- (8) 《原註》Krom, *Hindu-Jav. Gesch.*, p.5 (Krom 1931).
- (9) ジャワ語ではバトラ・グル (Bhatara Guru)。グルは「導師」の意味。
- (10) 現在ではインド・ゲルマン語族ではなくインド・ヨーロッパ語族と呼ぶのが一般的である。
- (11) ボロブドゥールの壁面浮彫は『華嚴經入法界品』などの仏教經典を出典としている。
- (12) 叙事詩『マハーバーラタ』は、いとこ同士であるパーンダワ (Pāṇḍawa) 5人兄弟とコーラワ (Korawa、サンスクリット語ではカウラワ Kaurawa) 100人兄弟の争いを描く。
- (13) ワヤン・プルワ (wayang purwa) のワヤンは「影」、プルワは「始原」を意味するが、とくに『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』を題材とするワヤン・クリ (影絵芝居) を意味する。
- (14) 叙事詩『ラーマーヤナ』は、王子ラーマ (Rāma) が、ラークシャサ (rākṣasa、羅刹) の王ラーワナ (Rāwana) に誘拐された妻シーター (Sītā) を、猿軍などの助けを得

- て救出する物語を語る。
- (15) カウイ (kawi) の原意は「詩人」である。「カウイ語」という表現はワヤンなどの語りに用いられる雅語を指す用語として現代でも使われている。したがって、歴史的な言語名としては「古ジャワ語」(Old Javanese) を用いるのが適当である。
- (16) 現在では、最古の古ジャワ語刻文はサカ暦 726 年 (西暦 804 年) の年号をもつスカブミ刻文と考えられている。《原註》Krom, *Hindu-Jav. Gesch.*, p.5 (Krom 1931)。
- (17) 古ジャワ語の刻文の概要については Casparis (1950, 1953) などを参照。
- (18) このように一種の「不輸不入の権」が設定された村全体または村の一部の土地はシーマ (sīma) と呼ばれた。シーマ設定権の独占は、古代ジャワにおける王による支配拡大の一手段であった。
- (19) イスラーム化する以前のジャワ社会はしばしばヒンドゥー・ジャワ (Hindu Java) と呼ばれる。ここでの「ヒンドゥー」は仏教を含むインド文化全体を指す意味で使われている。
- (20) 乾燥させたヤシの葉に文字を刻んで綴じ込んだ写本をジャワ語でロンタル (lontar)、日本語で貝葉 (ばいよう) と呼ぶ。古ジャワ語の文献はロンタルの形式で伝承されてきたものである。
- (21) 原題は Candakarāṇa。古ジャワ語文学の揺籃期からこのような文献が作成されたことは容易に想像できるが、実用書としての性格上、現存する写本には後代の改訂が加わっており、本文献をもって最古の古ジャワ語文献と呼ぶのは困難であろう。研究書として Rubinstein (2000) がある。
- (22) カカウイン (kakawin) は主にインド由来の韻律で書かれた古ジャワ語文学作品の総称である。パルワ (parwa) と対をなす。
- (23) 『ダサナマ』は「十の名称」の意で、語彙を同意語ごとにまとめた伝統的な辞書。《原註》Kern, *Verspreide Geschriften*, 第 9 巻, p.273。
- (24) 《原註》Krom, *Hindu-Jav. Gesch.*, p.135 (Krom 1931)。
- (25) 原題は Rāmāyaṇa。英訳として Robson (2015)、Soewito Santoso (1980)、インドネシア語訳として Poerbatjaraka (1990) がある。856 年から 930 年頃までの間に成立したと推測されているが、全 26 章のうち最後の 3 章はやや遅れて完成したとみられる (Robson 2015)。現存する最古の古ジャワ語文学作品である。
- (26) 《原註》Gedenkschrift 75-Jarig Bestaan Van Het Kon. Inst. Voor de Taal-, Land- en Volkenkunde van Ned. Ind., 1926。
- (27) 原題は Rāvaṇavadha で「ラーヴァナの死」の意。Bhaṭṭikāvya の別名でも知られる。ワールミーキ版『ラーマーヤナ』を圧縮したような内容であるが、第 9 巻『ウッタラカーンダ』に対応する部分を欠く。
- (28) 《原註》Cap-capan, 第 5 巻, p.346, p.363。
- (29) ムプ (mpu または ěmpu) は古ジャワ語で宮廷詩人などに対する敬称である。宮廷詩人は現代ジャワ語ではプジャンガ (pujangga) と呼ばれる。
- (30) 《原註》Tijdschrift Bat. Gen., 第 57 巻, p.510。
- (31) 引用部分は Zoetmulder (1974) により一部修正して訳出した。ヨーギーシュワラは「ヨーガ行者たちの教主」という意味であるが、ここでは原書の訳語に従って賢僧 (pendeta) と訳した。
- (32) 《原註》Kern, *Verepreide Geschriften*, 第 5 巻, p.77。
- (33) 原題は Sang Hyang Kamahāyānikan。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Kats 1910)。
- (34) 《原註》Kon. Inst. v. d. Taal- en Volk. v. Ned. Indië, Martinus Nyhoff, 's-Gravenhage 1910 (Kats 1910)。

- (35) 原題は Brāhmāṇḍapurāṇa。テキストとオランダ語訳 (Gonda 1932, 1933)、テキストと英訳 (Phalgunadi 2000) が刊行されている。
- (36) 《原註》Bibliotheca Javanica, 第 5 巻 (Gonda 1932, 1933)。
- (37) 原題は Agastyaparwa。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Gonda 1933-36)。
- (38) パルワ (parwa) は、本来『マハーバーラタ』全 18 巻の「巻」のことであるが、散文で書かれた古ジャワ語文学作品の総称である。韻文のカカウイン (kakawin) と対をなす。
- (39) 原題は Uttarakāṇḍa。テキストと英訳が刊行されている (Phalgunadi 1999)。
- (40) アルジュナ・サハスラバーフ (千本の腕をもつアルジュナ) はマヒスパティ (Mahispati) 国の王。パーンダワ兄弟のアルジュナとは別人。彼の活躍は『アルジュナウィジャヤ』(本書 30 番) に詳しい。
- (41) 原題は Ādiparwa で「序の巻」の意。テキスト (Hazeu 1901)、オランダ語部分訳 (Juynboll 1906)、テキストと英訳が刊行されている (Phalgunadi 1990)。『マハーバーラタ』全 18 巻のうち古ジャワ語版が現存しているのは本書で紹介されたもののみである。
- (42) 原題は Sabhāparwa で「集会の巻」の意。利用できる写本は現存せず (Zoetmulder 1974: 97-98)、刊本はない。
- (43) 原題は Wirātaparwa で「ウィラータの巻」の意。テキスト (Juynboll 1912)、オランダ語部分訳 (Fokker 1938)、テキストと英訳が刊行されている (Phalgunadi 1992)。
- (44) ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーワはパーンダワ 5 人兄弟、ドローパディーは彼らの妻である。サンスクリット語ではドローパディーの名と彼女の変名はドラアウパディー (Draupadī) とサイランドリー (Sairandhrī) である。原文の Sairindri を本文のように訂正した。
- (45) 原題は Udyogaparwa で「挙兵の巻」の意。テキストと英訳が刊行されている (Phalgunadi 1994)。
- (46) 原題は Bīṣmaparwa で「ビーシュマの巻」の意。テキストとオランダ語訳 (Gonda 1936)、テキストと英訳 (Phalgunadi 1995) が刊行されている。
- (47) 原題は Āśramawāsaparwa で「隠棲の巻」の意。原文の Asmarawasanaparwa を訂正した。テキストと英訳が刊行されている (Phalgunadi 1997)。
- (48) ハスティナは『マハーバーラタ』の舞台となった王都。現代ジャワ語ではアスティナ (Astina)、サンスクリット語版ではハスティナープラ (Hastināpura) と呼ばれる。
- (49) ウィドゥラとガンダリーはドリタラーシュトラの弟と妻、クンティーはパーンダワ兄弟の母である。
- (50) 原題は Mosalaparwa で「棍棒の巻」の意。サンスクリット語版では Mausalaparwa。テキストとオランダ語訳 (Juynboll 1893)、テキストと英訳 (Phalgunadi 1997) が刊行されている。
- (51) ヤドゥ族 (ヤーダワ Yādawa と呼ばれる) はヤドゥを始祖とする集団であり、ウリシュニ族はその一支族である。クリシュナはその一員であった。ヤドゥ族はマドゥラ (マトゥラ Mathura と呼ばれる) を拠点としていたが、クリシュナの指導のもと西に移動しドワーラワティー (ドワーラカー Dwārakā と呼ばれる) を建国したとされる。
- (52) ナーラダは有名な聖仙の一人。彼の言動はしばしば混乱を引き起こす。
- (53) 原文では、ワブルはバブル (Babru) と表記され、「ジャワ語ではアルヤ・プラブ Arya Prabhu である」と注記されている。
- (54) サンスクリット語版『マハーバーラタ』では、クリタワルマンがパーンダワの軍勢への夜襲に参加したことの卑怯さをサーティヤキが非難したことになっている。
- (55) バラデーワはインド神話上の蛇王シェーシャ (Śeṣa) の転生とされる。

- (56) 原題は Prasthānikaparva で「旅の巻」の意。サンスクリット語版では Mahāprasthānikaparva。テキストとオランダ語訳 (Juynboll 1893)、テキストと英訳 (Phalgunadi 1997) が刊行されている。
- (57) 原題は Swargarohanaparva で「昇天の巻」の意。サンスクリット語版では Svargārohanaparva。テキストとオランダ語訳 (Juynboll 1893)、テキストと英訳 (Phalgunadi 1997) が刊行されている。
- (58) 原題は Kuñjarakarna。原書で紹介されている散文のバージョンとは別に、『クンジャラカルナ・ダルマカタナ』(Kuñjarakarna Dharmakathana) と題された韻文 (kakawin) のバージョンが存在している。散文版はテキストとオランダ語訳 (Kern 1901) が、韻文版はテキストと英訳 (Teeuw and Robson 1981) が刊行されている。現在の研究では、この作品は 14 世紀末から 15 世紀のマジャパヒト王国時代に作成されたと推定されている (Teeuw and Robson 1981: 46)。
- (59) 原題は Arjunawiwāha で「アルジュナの結婚」の意。テキスト (Friederich 1850)、オランダ語訳 (Poerbatjaraka 1926) が刊行されている。
- (60) 《原註》Verhandeligen Bat. Gen., 23 巻 (Friederich 1850)。
- (61) 《原註》Bijdragen Kon. Inst., 82 巻, 1926 年 (Poerbatjaraka 1926)。
- (62) 原題は Kṛṣṇayāna。
- (63) 原文では、ラデン・ルクマなど、しばしば王族にラデンの称号を付けているが、ラデンは現代ジャワ語の用法なので、訳文では一括して省略した。
- (64) 原文の Nayarana Maling を本文のように訂正した。ナラヤナはクルスナの別名。
- (65) このワルシャジャヤは、西暦 1104 年発布の刻文に記されたジャヤワルシャ (Jayawarṣa) と同一人物であると比定されていた。しかし、現在ではこの刻文の年号は西暦 1204 年に訂正されており、この比定は成立しない。《原註》オランダ語による物語の概要は以下に掲載 : Tijdschr. Bat. Gen., 58 巻。
- (66) 原題は Sumanasāntaka。テキストと英訳が刊行されている (Worsley et al. 2013)。
- (67) 古ジャワ語ではスワヤンバラ (swayambara)、現代ジャワ語ではサユンバラ (sayēmbara) と呼ばれる。なお、プリヤンバダは『ハリワンシャ』(本書 23 番) ではクリシュナの従者として登場する。
- (68) 原文の天女 (widyādhari) を天人 (widyādhara) に訂正した。
- (69) 川の合流地は聖地とされている。
- (70) 上述のとおり、テキストと英訳が刊行されている (Worsley et al. 2013)。
- (71) 原文の Manoguna を Zoetmulder (1974) に従って Monaguna に訂正した。
- (72) 原題は Smaradahana。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Poerbatjaraka 1931)。
- (73) カーマ神は愛の神である。原文のカーマジャヤ (Kāmajaya) という表記は、現代ジャワのワヤンの用法であるので、古ジャワ語の用法に従ってカーマ神と表記した。
- (74) 現在では、12 世紀前半のカーメーシュワラ王の名は正しくはバーメーシュワラ (Bāmeśwara) であると考えられている。したがって、著者がカーメーシュワラ 2 世と呼ぶ王がカーメーシュワラ王ということになり、彼の治世である 12 世紀後半に『スマラダハナ』が作成されたと考えられる。
- (75) パンジ物語は、東ジャワを舞台にパンジと通称される王子を主人公とした、中期ジャワ語以降の文献に現れる物語群。マレー半島からタイに伝わってタイ語のイナウ物語の原型となった。
- (76) 《原註》Bibliotheca Javanica, 第 3 巻 (Poerbatjaraka 1931)。
- (77) 原題は Bhomakāwya。別名 Bhomāntaka。テキスト (Friederich 1852)、オランダ語訳 (Teeuw 1946)、テキストと英訳 (Teeuw and Robson 2005) が刊行されている。
- (78) 原題は Bhāratayuddha で「バラタ族の戦争」の意。テキスト (Gunning 1903)、テキ

- ストと英訳 (Supomo 1993) が刊行されている。
- (79) *sanga kuda śuddha candramā* は現代ジャワ語でチャンドラ・スンカラ (*candra sengkala*) と呼ばれる言葉による年号表示の方法である。それぞれ「九、馬、清浄、月」を意味し、数字の「9、7、0、1」を表す。これを逆に読むとサカ暦 1079 年を示す。
- (80) サティヤワティの名前はサンスクリット語版『マハーバーラタ』には見られない。
- (81) スルク (*suluk*) は、ワヤンの上演において場面の継続・転換で語られる呪文のような章句。場面の雰囲気を決定する働きがある。
- (82) 原題は *Hariwangśa*。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Teeuw 1950)。
- (83) アマルタ (*Amarta*) 国は、コーラワ兄弟との衝突を回避するためにパーンダワ兄弟に与えられた王国のジャワのワヤンでの名称である。サンスクリット語および古ジャワ語の文献ではインドラプラスタ (*Indraprastha*) と呼ばれる。
- (84) 括弧内の著者の訳文は Zoetmulder (1982) に従って一部訂正した。
- (85) 原題は *Ghaṭotkacāśraya*。インドネシア語訳が刊行されている (Wirjosuparto 1960)。
- (86) アビマニュとクシティ・スンドラーはいとこ同士の関係にあり、望ましい婚姻関係とみなされていた。クシティ・スンドラーはジャワのワヤンではシティ・スンドラー (*Siti Sundari*) と呼ばれる。
- (87) キンマの葉でビンロウの実と石灰などを包み、口に入れて噛む嗜好品とする。ジャワでは祝事、儀式などにも用いられる。
- (88) ガトートカチャはパーンダワ兄弟の三男ビーマとラークシャサの女との間に生まれた息子で、ラークシャサの世界に住み、超能力を持つとされる。アビマニュの従兄弟にあたる。
- (89) 原文のブラジャダanta (*Brajadanta*) をバジュラダanta に訂正。
- (90) ガトートカチャがビーマの息子であることから、復讐の対象とした。
- (91) トリウィクラマとは、本来ウィシュヌ神の別称だが、ここでは、巨大な憤怒相に変身した姿のことを指す。
- (92) ダーナワ (*dānawa*) やデーティヤ (*detya*) はラークシャサとともに、神々に敵対する悪鬼の種類を指す。
- (93) 《原註》『スダマラ』(本書 43 番) からの引用である。
- (94) 引用文は Zoetmulder (1974) に従って一部訂正した。
- (95) パナカワン (*panakawan*) は、ワヤンの中に登場する召使あるいは従者たちのことを指し、物語中で道化あるいは助言者としての役割を果たす。
- (96) 原題は *Wrttasañcaya*。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Kern 1875)。
- (97) 原文の *Candakirana* を *Candakarana* に訂正した。
- (98) 原題は *Lubdhaka Kakawin*。Śiwarātrikalpa の別名でも知られる。テキストと英訳が刊行されている (Teeuw et al. 1969)。現在では、作中の王名をケン・アンロックに結びつける著者の想定は誤っており、この作品は 15 世紀末に作成されたと推定されている (Teeuw et al. 1969: 60-66)。したがって、この作品はマジヤパヒト王国時代の末期を代表するカカウイン文学作品ということになる。
- (99) 引用文は Zoetmulder (1974) に従って一部訂正した。
- (100) ケン・アンロックは 1222 年にトゥマプル (現在のマラン付近) にシンガサリ王国を創建した。《原註》『ルブダカ』に見えるギリンドラワンシャジャをケン・アンロックに同定したクロムの説は正しかった (Tijdschr. Bat. Gen., 57 巻, p.518)。

参考文献（第3章までに関連する文献）

使用されている略語一覧

BI	Bibliotheca Indonesica
BJ	Bibliotheca Javanica
BKI	Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde
VBG	Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen. Batavia.
VG	Verspreide Geschriften (Kern 1917-1922)
VKI	Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde

Casparis, J. G. de

- 1950 *Prasasti Indonesia, I Inscripties uit de Cailendra-tijd*. Bandung.
1953 *Prasasti Indonesia, II Selected Inscriptions from the 7th to the 9th Century A.D.* Bandung.

Fokker, A. A.

- 1938 *Wirāṭaparwa: Opnieuw uitgegeven, vertaald en toegelicht*. 's-Gravenhage.

Friederich, R. Th. A.

- 1849 *Wrēttasantjaja*. VBG 22.
1852 *Boma Kawya, in het oorspronkelijke Kawi*. VBG 24.
1850 *Ardjuna-Wiwaha, een oorspronkelijk Kawi-werk, volgens een Balineesch Manuscript*. VBG 23.

Gericke, J. F. C. and T. Roorda

- 1901 *Javaansch-Nederlandsch Handwoordenboek*. 2 vols. Amsterdam / Leiden.

Gonda, J.

- 1932 *Het Oud-Javaansche Brahmāṇḍa-Purāṇa: Prozatekst en kakawin*. BJ 5. Bandoeng.
1933 *Het Oud-Javaansche Brahmāṇḍa-Purāṇa, vertaald door—*. BJ 6. Bandoeng.
1933-36 *Agastyaparwa, uitgegeven, gecommenteerd en vertaald*. BKI 90, pp. 329-419; 92, pp. 337-458; 94, pp. 223-285.
1936 *Hed Oudjavaansche Bhīṣmaparwa*. BJ 7. Bandoeng.

Gosh, Manomohan

- 1936 On the source of the Old-Javanese Rāmāyaṇa kakawin. *Journal of the Greater India Society* 3, pp. 113-117. Calcutta.

Gunning, J. G. H.

- 1903 *Bhārata-Yuddha: Oudjavaansch heldendicht*. 's-Gravenhage.

Hazeu, G. A. J.

- 1901 *Het Oud-Javaansche Ādiparwa en zijn Sanskr̥t-origineel*. TBG 44, pp. 289-357.

Horne, E. C.

- 1974 *Javanese-English Dictionary*. New Haven / London.

Juynboll, H. H.

- 1893 *Drie boeken van het Oudjavaansche Mahābhārata in Kawi-tekst en Nederlandsche vertaling, vergelekn met den Sanskrit-tekst*. Leiden.
1906 *Ādiparwa: Oudjavaansch prozageschrift*. 's-Gravenhage.
1912 *Wirāṭaparwa: Oudjavaansch prozageschrift*. 's-Gravenhage.

Kats, J.

- 1910 *Sang Hyang Kamahāyānikan: Oud-Javaansche tekst met inleiding, vertaling en aantekeningen*. 's-Gravenhage.

Kern, H.

- 1875 *Wṛtta-Saṅcaya: Oudjavaansch leerdicht over versbouw. In Kawi-tekst en Nederlandsche vertaling*. VG IX, pp. 67-189.
1900 *Rāmāyaṇa kakawin: Oudjavaansch heldendicht*. 's-Gravenhage.
1901 *De legende van Kuñjarakarna: Volgens het oudst bekende handschrift, met Oudjavaanschen tekst, Nederlandsche vertaling en Aanteekeningen*. VG X, pp. 1-76.

- 1917-22 *Verspreide Geschriften VI-X.* 's-Gravenhage.
- Krom, N. J.
1931 *Hindoe-Javaansche geschiedenis.* 2nd ed. 's-Gravenhage.
- Phalgunadi, I Gusti Putu
1990 *The Indonesian Mahābhārata: Ādiparva - The First Book.* New Delhi.
1992 *The Indonesian Mahābhārata: Virātaparva - The Fourth Book.* New Delhi.
1994 *The Indonesian Mahābhārata: Udyogaparva.* New Delhi.
1995 *The Indonesian Mahābhārata: Bhīṣmaparva.* New Delhi.
1997 *The Indonesian Mahābhārata: Āśramavāsaparva, Mosalaparva, Prasthānikaparva, Svargārohaṇaparva.* New Delhi.
1999 *Indonesian Rāmāyaṇa: The Uttarakāṇḍa.* New Delhi.
2000 *The Indonesian Brahmāṇḍapurāṇa.* New Delhi.
- Pigeaud, Th. G. Th.
1938 *Javaans-Nederlands Handwoordenboek.* Groningen / Batavia.
1967-80 *Literature of Java: Catalogue Raisonné of Javanese Manuscripts in the Library of the University of Leiden and Other Public Collections in the Netherlands.* 4 vols. The Hague.
- Poerbatjaraka, R. M. Ng.
1926 *Arjuna-Wiwāha: Tekst en vertaling.* BKI 82, pp. 181-305.
1931 *Smaradahana: Oud-Javaansche tekst met vertaling.* BJ 3. Bandoeng.
1990 *Rāmāyaṇa Djawa-Kuna: Teks dan terjemahan.* 2 vols. Jakarta.
- Robson, S.
2008 *Arjunawiwāha: The Marriage of Arjuna of Mpu Kanwa.* BI 34. The Hague.
2015 *The Old Javanese Rāmāyaṇa.* Tokyo. (forthcoming)
- Robson, S. and Singgih Wibisono
2002 *Javanese English Dictionary.* Jakarta.
- Rubinstein, Raechelle
2000 *Beyond the realm of the senses: The Balinese ritual of kekawin composition.* Leiden.
- Sarkar, Himansu Bhusan
1934 *Indian influence on the literature of Java and Bali.* Greater India Studies no.1. Calcutta.
- Soewito Santoso
1980 *Rāmāyaṇa Kakawin.* 3 vols. New Delhi.
- Supomo, S.
1993 *Bhāratayuddha: An Old Javanese poem and its Indian source.* New Delhi.
- Teeuw, A.
1946 *Het Bhomakāwya: Een Oudjavaans gedicht.* Groningen.
1950 *Hariwaṅśa.* VKI 9. 2 vols. The Hague.
- Teeuw, A. and S. O. Robson
1981 *Kuñjarakarṇa Dharmakathana: Liberation through the Law of the Buddha. An Old Javanese Poem by Mpu Ḍusun.* BI 21. The Hague.
2005 *Bhomāntaka: The Death of Bhoma.* BI 32. The Hague.
- Teeuw, A. and Th. P. Galesting, S. O. Robson, P. J. Worsley, P. J. Zoetmulder
1969 *Śiwarātrikalpa of mpu Tanakuṅ: An Old Javanese Poem, its Indian source and Balinese illustrations.* BI 3. The Hague.
- Tuuk, H. N. van der
1897-1912 *Kawi-Balinesesch-Nederlandsch woordenboek.* 4 vols. Batavia.
- Wirjosuparto, Raden Mas Sutjipto
1960 *Kakawin Ghaṭotkacāçraya Tjeritera lakon dalam bahasa Kawi.* Jakarta.
- Worsley, W. and S. Supomo, Th. Hunter, Margaret Fletcher
2013 *Mpu Monaguṇa's Sumanasāntaka: An Old Javanese Epic Poem, its Indian source and Balinese illustrations.* BI 36. The Hague.
- Zoetmulder, P. J.
1974 *Kalangwan: A Survey of Old Javanese Literature.* The Hague.
1982 *Old Javanese-English Dictionary.* 2 vols. The Hague.